HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共振する芸術と教育(5) : ヨーゼフ・ボイスの自由国際大学(FIU)
Author(s)	前原, 真吾
Citation	独語独文学研究年報, 42, 24-59
Issue Date	2016-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61103
Type	departmental bulletin paper
File Information	42_02_maehara.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

共振する芸術と教育（５）
― ヨーゼフ・ボイスの自由国際大学（ＦＩＵ）―

前原　真吾

はじめに

これまでの各稿においては、デュッセルドルフ芸術アカデミー教授であったヨーゼフ・ボイス（Joseph Beuys, 1921-1986、モニュメント彫刻講座担当、在職期間1961-1972）が提起した独特な教育理念について社会システム理論の観点から検討を加え、また、ボイス自身が芸術アカデミーで10年あまりにわたって実践した数々の〈教育的コミュニケーション行為〉の試みに注目し、それらの方法、目的、成果、および教育上の意義について、当時の学生や同僚教授たちの証言を手掛りとしつつ、詳細な検証を行なってきた[1]。

引き続いて本稿で考察されるのは、ヨーゼフ・ボイスが芸術アカデミー教授職を罷免されて、正規の教育業務から離れることになった1972年10月以降の展開である。この時期のボイスは、その人生最期のときを迎えるまで、教育者の基本的役割である〈人格形成〉だけでなく、〈社会形成〉というさらに困難な問題領域についても従来以上に精力的かつ多面的に取り組んでいくことになる。そして、こうしたボイスの活動を支える基盤となったのが、伝統的な〈教育的コミュニケーション行為〉や既存の教育機関への〈対案（Alternative, オルタナティブ）〉としてボイスによって作られた〈社会彫刻作品（die soziale Plastik）〉[2]のひとつ、「自由国際大学（Freie Internationale Universität, 以降はＦＩＵと略称）」という教育研究機関である。

本稿では、〈拡張された芸術概念（der erweiterte Kunstbegriff）〉を実践するための公式フォーラムと位置づけられた自由国際大学（ＦＩＵ）の存在意義と、この組織を基盤としてボイスが推進した諸々のプロジェクトの実相を分析することで、〈教育者〉ボイスが同時代の人々に伝えようと尽力した政治的、社会的、教育学的なメッセージの意味を明らかにしていく。

１．ＦＩＵ設立の理念と背景

ヨーゼフ・ボイス（ＦＩＵ学長）がクラウス・シュテック（Klaus Staeck, 1938-、グラフィックデザイナー、弁護士、ＦＩＵ理事長）[3]、ゲオルク・マイスターマン（Georg Meistermann, 1911-1990、カールスルーエ芸術アカデミー教授、ＦＩＵ副理事長）、ヴィリ・ボンガルト（Willi Bongard, ?-1985、経済・芸術ジャーナリスト、ＦＩＵ書記）、エルヴィン・ヘーリヒ（Erwin Heerich, 1922-2004、デュ

---

[1] 前原真吾「共振する芸術と教育（４）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1968－1972)」『北海道大学独語独文学研究年報』第41号, 2014年, 21-52頁；「共振する芸術と教育（３）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1964－1967)」同第40号, 2013年, 24-53頁；「共振する芸術と教育（２）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1961－1963)」同第39号, 2012年, 1-27頁；および「共振する芸術と教育（１）ヨーゼフ・ボイスの教育思想」同第38号, 2011年, 26-50頁。

[2] ボイスによって示された〈拡張された芸術概念〉および〈社会彫刻〉の〈教育的コミュニケーション行為〉における意味については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育思想」を参照のこと。

[3] 出版社の経営者でもあったクラウス・シュテックは、ボイスとは1968年からその作品の出版を通して、また「ケルンの美術展示会の排他的姿勢への反対声明」（1971年）などといった社会的活動を通して協働していた。1971年からカッセル総合大学で、また1986年からはデュッセルドルフ芸術アカデミーで客員講師を務め、2006年から2015年までベルリン芸術アカデミー（die Akademie der Künste in Berlin）の会長を務めた。

ッセルドルフ芸術アカデミー教授）といった人々とともに、1973年４月27日にその設立を告知した「創造性と学際的研究のための自由国際大学（Freie Internationale Universität für Kreativität und interdisziplinäre Forschung)」は、デュッセルドルフ市役所において正式に登録された公益団体（gemeinnützig anerkannter eingetragener Verein）であった[4]。そしてこの公益団体は、「芸術アカデミーの〔教育〕能力とその伝統的な職責範囲を拡張する」こと、および「従来の教育システムに取って代わるのではなく、その‘モデル’として競合しつつ並び立つ」[5]教育研究機関となることを当初から目標として掲げていた。

しかしながら、こうした目標を掲げたにもかかわらず、形式的にはボイス没後も1988年まで存続したこのＦＩＵは、「大学」というその名称から想定されるような一般的な教育研究機関と比べると相当に異質な存在であった。なぜなら、正式な教育カリキュラムや講座の整備が企画段階で中断したために、ＦＩＵは15年あまりのその活動期間中、一度も正規の講師・教授陣や学籍登録された学生たちを擁することがなかったからである。教育機関としての運営に必要な資金・施設（キャンパス）の確保が円滑に進まなかったという事情はあったものの、その主たる原因は、そもそもボイス自身が伝統的形式に則った教育活動に価値を見出していなかったことにあった。つまり、ボイスの関心は従来のような教育研究の実践に対してではなく、産業資本主義社会の論理を当然と見なす人々の意識改革を促進する活動、ドイツ連邦共和国をはじめとする先進諸国の非民主的な政治社会制度を変革する活動――社会改革・教育改革・環境保護等を実現するためのさまざまな〈社会彫刻プロジェクト〉の遂行を通じた教育――へと向けられていたのである。

結論から先に述べると、こうした特殊性を備えた「ボイスの大学」は、かつてない革新的かつ民主的な綱領を掲げたオルタナティブな政治組織である「緑の党（緑の人々、die Grünen)」をドイツに初めて成立させるとともに、多くの派生組織（ダブリン、アムステルダム、ゲルゼンキルヒェン、ハンブルク、ミュンヘン等でボイスのかつての学生たちや賛同者が発足させた独自のＦＩＵ）[6]を誕生させ、また、アッハベルクに社会研究所とＦＩＵの広報活動を引き継ぐ出版社・通信販売会社を残し、それらの組織に活動理念を引き継がせたのちに解散した。

1960年代後半からデュッセルドルフ芸術アカデミーでボイスの学生およびマイスターシューラー（Meisterschüler）として学び、のちにこのＦＩＵの管理運営を担当することになったヨハネス・シュテュットゲン（Johannes Stüttgen, 1945-）は、1984年にＦＩＵの活動を振り返った報告書を発

---

[4] このときのほかの創設メンバーは、ゲルハルト・リヒター（Gerhard Richter, 1932-、デュッセルドルフ芸術アカデミー教授)、ヴァルター・ヴァルナッハ（Walter Warnach, 1910-2000、デュッセルドルフ芸術アカデミー教授)、パウル・ヴェンバー（Paul Wember, 1913-1987、芸術史家・クレーフェルト美術館長)、オイゲン・ティーマン（Eugen Thiemann, 1925-2001、芸術史家・ドルトムント美術館長)、メリッタ・ミッチャーリヒ（Melitta Mitscherlich, 1906-1992、医師・デュッセルドルフ大学講師）であった。

[5] Harald Szeemann(Hg.): *Beuysnobiscum*. Philo Fine Arts (Europäische Verlagsanstalt), Hamburg 2008, S.156. なお、以降の引用文中における〔 〕内の文言は訳者による追記を、また〔…〕は一部省略された部分があることを示す。

[6] これらの組織のうち、とくに1980年にハンブルクに創設された「自由芸術学校ハンブルクＦＩＵ（Freie Kunst Schule Hamburg FIU)」は、最初のＦＩＵとは異なり、セメスター制を取り入れた４年間の正式な教育カリキュラム、さまざまな履修コース、正規の講師陣を備えた「芸術・学際的研究・社会彫刻のための専門の教育研究機関」として現在まで運営され、多数の卒業生を輩出している。また、日本にも「自由国際大学」の名称を掲げた組織が形成され、ボイスの意志を引き継ぐ活動を推進することを謳っている。

表し、さらにその増補第２版をＦＩＵ解散直前の1987年に再び刊行している[7]。本章では、このシュテュットゲンによる報告書の記述を参照しつつ、芸術アカデミー教授であったころのヨーゼフ・ボイスが「ＦＩＵ創設」を宣言するまでの前史について概観する。

１．１〈教育の自律性〉という基本理念

1973年の設立宣言時に「ＦＩＵの最も重要な原則」として掲げられたのは、組織の完全なる「自治（Selbstverwaltung / Selbstbestimmung)」[8]を実現すること、すなわち「教育・学習プログラムへの国家および個人による影響力行使を完全に排除すること」[9]であった。国家によって運営される官立学校でもなく、特定個人の恣意によってその教育方針を左右される私立学校でもない、そこに所属する人々の自由意志にしたがって自律的に運営される組織をめざす、という宣言である。ＦＩＵ書記を務めることになったヴィリ・ボンガルトは、この点について次のように補足している：

> このヨーゼフ・ボイスの「自由な学校」は、〔…〕人々が通常思い描いている学校というものを、現代的な都市社会におけるコミュニケーションセンターのような方向へと拡張していく可能性を示しています。そこでは、点数による能力・業績の管理（die Leistungskontrolle）などという、一般的な方式は採用されません。その代わり、基本法（das Grundgesetz, 憲法）にしたがって資金を援助してくれる〔有志の〕協会による管理（die Kontrolle der Gesellschaft）を積極的に求めるものであります。[10]

つまり、公的な権力機構や民間の営利団体などから運営資金を与えられ、それら外部者の意向を受けて教育研究と業績管理を遂行するような他律的機関ではなく、そこでともに学び教えあおうと考える市民の協力によって民主的に運営される「自由な組織である」ことが強調されたわけである。

ＦＩＵ設立メンバーがこのように組織の自律的運営という方針を強く前面に打ち出した背景に、当時のノルトライン＝ヴェストファーレン州科学大臣ヨハネス・ラウ（Johannes Rau, 1931-2006、ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）の政治家）による、ボイスの芸術アカデミー教授職罷免という一件が影響していたことは否定はできない。しかし、「教育機関の完全な自律性」という主張の中核を構成していたのは、実際には、ボイスが芸術アカデミー在職中に創出した〈拡張された芸術概念〉――現代社会における真の〈芸術作品〉とは〈自由に思考し創造する人間〉という存在それ自体、および、そうした人間たちが作り上げる〈より自由で民主的な社会〉であるという考え方――と、これを原点として取り組んできた独特な教育的・社会的活動の成果であった：

> 芸術作品としての社会有機体〔…〕、この最も現代的な社会彫刻、社会建築という芸術原理は、地上に生きる人間の最後の一人にいたるまでがその協働形成者となるとき、社会有機体の彫刻家や建築家となるときに、初めて完全な形で実現されることになるのです。[11]

---

[7] Johannes Stüttgen: *Freie Internationale Universität. Organ des erweiterten Kunstbegriffs für die Soziale Skulptur. Eine Darstellung der Idee, Geschichte und Tätigkeit der FIU. 2.erweiterte Auflage*, FIU-Versand, Wangen 1987.

[8] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.9.

[9] Volker Harlan u.a.: *Soziale Plastik. Materialien zu Joseph Beuys.* Achberger Verlag, Achberg 1984, S.37.

[10] Szeemann: *Beuysnobiscum*, S.156.

[11] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.121.

このような芸術概念を掲げたボイスが、デュッセルドルフ芸術アカデミーでの教育活動において一貫して重視していたのは、「教育プロセスが再び権威主義的（autoritär）なものに戻ってはならない」[12]こと、「学校という分野の全体が進化して完全なる自律を獲得すべきである」[13]こと、そして、これが実現されたときに、はじめて〈自由で民主的な社会〉を作り上げる〈自由に思考し創造する人間〉の形成＝教育（Bildung）が可能になる、という見地であった。

とはいえ、〈教育的コミュニケーション行為〉の内部における教育者・学習者間の権威主義的人間関係の払拭、権力機構による外部からの不当な干渉の排除という問題が、大学やアカデミーといった個々の教育機関それ自体において独自に解決しうる性質のものでないことは明らかである。なぜなら、社会全体の部分システムとしての〈教育システム〉は、その時代の社会体制と、それを作り上げ、それを受け入れ、それに依存して生きる多くの人々の意識やコミュニケーションを反映して構成され、作動するからである。したがって、社会体制と人々の意識およびコミュニケーションが「積極的な自由の完全な実現」[14]を追求する方向へと変化しない限り、また、〈教育の自律性〉を認めない社会体制を前提としたり、権威主義を肯定する人間の再帰的形成を前提としたりする〈教育的コミュニケーション行為〉が続けられている限り、ボイスが希求する教育プロセスの自律性は実現不可能な理想にとどまらざるをえないのである[15]。

しかも、この問題を追究していくと、すぐに一種の因果性のジレンマに突き当たる。〈自由で民主的な社会〉の形成には〈教育の自律性〉が必要である、しかし、〈教育の自律性〉を確保するためには〈自由で民主的な社会〉がその前提として必要になる、という矛盾である[16]。そこで、この矛盾を解消するためにボイスが選択したのは、両者の実現を同時に遂行するという方法であった。すなわち、芸術アカデミーにおける教育的コミュニケーションをアカデミーの外部へと拡張し[17]、〈社会の教育＝形成〉を試みると同時に、アカデミー内部でも学生たちに〈社会彫刻〉を実践的に学ばせるという――のちに、ＦＩＵ創設の基本構想へとつながっていく――教育方法である。

自らの厳格な教育理念にしたがって行動を続けた結果、国家権力や官僚組織、偏狭な役人気質（Beamtenmentalität）の同僚教員たちとの対立を幾たびも経験せざるをえなかったボイスは、すでに芸術アカデミー在職時より、こうした教育方法で芸術アカデミーを国権支配から解放された自律的組織へと再編成するための社会変革を構想していた。そして、芸術アカデミー外部からも多くの論者が参加していた円座討論会（Rundgespräch）[18]において、〈社会彫刻〉をテーマとする議論が

---

[12] Harlan u. a.：*Soziale Plastik*, S. 39.

[13] Harlan u. a.：*Soziale Plastik*, S. 38.

[14] エーリヒ・フロム『自由からの逃走』東京創元社, 1965年, 4頁。ボイスの教育思想とフロムが示した〈積極的な自由〉の観念の関係については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1961－1963)」11頁を参照。

[15] なぜなら「コミュニケーションは、独自の再帰性を展開する。すなわち、コミュニケーションは、前のコミュニケーションを手がかりとし、次のコミュニケーションを先取りしてなされる」からである。ニクラス・ルーマン『社会の教育システム』東京大学出版会, 2004年, 39頁。

[16] より一般的な形式で表現すると、このジレンマは「α が β なしでは成立せず、また、β が α なしでは成立しないという場合、最初に成立したのは（成立させうるのは）α と β のいずれだろうか？」となるであろう。

[17] Heiner Stachelhaus: *Joseph Beuys*. List Verlag (Ullstein), Berlin 2006, S. 79に記録されたボイスの「私のいる場所がアカデミーなのです」という言葉は、自らの教育実践が教育制度上の時間的・空間的・社会的境界を越えていくものである、というボイスの基本姿勢を示すものであるといえる。

[18] 教育方法としての「円座討論会」については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1968－1972」44-50頁を参照。

繰り返されていく過程で、ボイスのクラスは、社会変革を志向する反権威主義的な「議会外反対派（außerparlamentarische Opposition, 略称ＡＰＯ)」の中心地のひとつと捉えられることになったのである[19]。

もちろん、ＡＰＯとはいっても、マルクス主義のイデオロギーに対してさえ批判的であったボイスであるから、その集会の参加者たちもまた、従来の枠組みに囚われない新しい価値観を求めてオルタナティブを模索していた人々、世界は〈別なふうでもありえる〉と考えていた人々であった。つまり、彼らがめざした地点は、学生運動の主体となった同時代の多くの党派的な、いわゆる〈階級闘争による社会発展〉を志向する急進左翼団体のＡＰＯが追求した目標とは、本質的に異なっていたのである。こうした両者の差異は、社会変革の第一歩として「すべての人間を精神的に成熟〔＝自律〕させるための教育（die Erziehung aller Menschen zur geistigen Mündigkeit)」[20]を実現するために、ボイスが円座討論会参加者とともに創設した「ドイツ学生党（Deutsche Studentenpartei)」[21]においてはっきりと示された。ボイスが「最高の芸術作品」あるいは「教育党（Erziehungspartei)」とも呼んだこのドイツ学生党は、中心メンバーの一人であったヨハネス・シュテュットゲンによると、以下のような主張を掲げる組織であった：

> この党は、自らの立場を「政党に反対するもの（Antipartei)」あるいは「政党を超えたもの（Metapartei)」と規定し、そうした立場から〔政党政治を〕変えていくことを基本方針として、政治的駆け引きの場に介入することを宣言したのです。その綱領には、特に以下のような項目が含まれていました〔…〕。
> 「完全非武装」「東西分裂状態の克服・中立的な統一ヨーロッパ」「文化・法律・経済などの〔社会の〕独立した各領域の自由連合的体制下での自治」「男性と女性の同権」「賃金労働制の克服」「真にキリスト教的な世界の実現」「理念レベルでの闘争」「土壌、水界、大気の浄化」。
> このドイツ学生党は「右翼・中道・左翼」といった時代遅れで有害無益な伝統的図式に則って分類されることを拒絶し、支配的な権力構造、政党政治の構造と戦うことを主張したのです。[22]

ドイツ学生党において掲げられたこのような基本方針を全面的に踏襲しつつ、そのうえで〈教育の自律性〉という問題を起点としながら、人々の意識とコミュニケーションのあり方を変えていくために創設された、市民レベルでの対話と協働を実現するためのフォーラムがＦＩＵであった。ヨハネス・シュテュットゲンは、〈社会彫刻〉概念との関連性を強調しつつ、この点についても次のように記している：

> 「拡張された芸術概念」がめざしているのは、社会生態学的有機体の全体（der gesellschafts-ökologische Gesamtorganismus）を自由な姿へと作り上げること、それが「社会彫刻」という総合芸術なのです。これを創出する作業には、あらゆる人間が芸術家として（jeder Mensch als

---

[19] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.23-24. 当時のＡＰＯの詳細については、西田慎『ドイツ・エコロジー政党の誕生 「六八年運動」から緑の党へ』昭和堂, 2009年, 15-50頁を参照。ただし、同書ではＡＰＯ、緑の党とヨーゼフ・ボイスの関係については、なぜかほとんど言及がない。

[20] Szeemann: *Beuysnobiscum*, S.89.

[21] 学生運動という特異な時代背景における、このドイツ学生党の存在意義については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1968－1972」26-29頁を参照。

[22] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.24-25.

Künstler)、自身の特別な能力と創造性とを用いて参加するのです。誰にでも備わっている能力とエネルギーを呼び覚まし、育て上げ、活用することが人間の使命なのです。それゆえに自由国際大学（ＦＩＵ）は、国家や私的資本の権力による包囲網から学校教育制度を救い出すことこそ、ほかのあらゆる事柄〔を変革していくため〕の前提条件であると見なしているのです。[23]

そして、このＦＩＵというフォーラムを基盤とするボイスの諸々の社会的活動が、のちに〈環境保護運動〉と〈草の根市民運動〉という２つのオルタナティブの潮流をひとつに統合した「緑の党」の中核理念を形成することになる。

１．２ 設立までの経緯

１．２．１ 直接民主主義のための事務所

ＦＩＵの設立が公式に宣言されたのは、ボイスがデュッセルドルフ芸術アカデミー教授職を罷免されたのちのことであったが、上述したＡＰＯ、すなわちドイツ学生党の理念がいくつかの段階を経て最終的にＦＩＵへと結実していくプロセス自体は、ボイスの芸術アカデミー在職時から少しずつ進行していた。「芸術アカデミー」というひとつの教育機関の枠組みを越えて、大きく社会へと広がっていく「自由な学校」の構想が、すでに具体性をもって策定されていたのである。はじまりは1970年３月２日、ボイスが200人あまりの支援者とともに、デュッセルドルフ旧市街区にドイツ学生党のための独自の「事務所」を開設したことであった：

ボイスはそれを、誰でも利用できる公開された情報センター、活動拠点として設置しました。そして、芸術アカデミーという個別な世界の外部へと、最初の一歩を踏み出したわけです。[24]

これと同時に、芸術アカデミー内のＡＰＯであったドイツ学生党も、「イニシアティブ／国民発案」による直接民主主義の追求をその組織名に掲げた「自由な国民投票を支持する投票棄権者の組織（Organisation der Nichtwähler für Freie Volksabstimmung)」へと移行して、芸術アカデミーから離れた組織となり、同年６月の州議会選挙に際しては、「政党への投票拒否」を各地で訴えて回るというアクションを展開した。さらに翌1971年、この投票棄権者の組織は「国民投票（自由な国民発案）による直接民主主義を支持する組織（Organisation für direkte Demokratie durch Volksabstimmung（freie Volksinitiative))」と改名され、正式な政府登録団体として認可された。間接民主制にもとづく既存の政党政治に反対して直接民主主義（草の根民主主義）を実現することが、社会変革を推進するために必要な「最初の政治的手続き」として位置づけられたのである：

このときボイスは、「そろそろ政党独裁政治を打ち負かそう！」とか「政党に投票するのはもうやめよう、やつらが代表しているのは出資者の利益であって、国民の利益ではないからだ！」といったスローガンを掲げて、投票を拒否すること、市民もしくは国民によるイニシアティブの制度を創設することを訴えたのです。それが、自己決定（Selbstbestimmung）と〔…〕反資本主義的経済システムにもとづく新しい社会の形成にとって、出発点になるはず

[23] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S. 22.
[24] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S. 26.

だったからです。[25]

ボイス自身は、この事務所をたんなる「事務作業のための空間」ではなく、新しい「自由な学校」と位置づけて、次のように述べている：

> 私たちの直接民主主義のための情報センターは、道端にある簡素なものですが、展示窓があって、いつでもそこに〔私たちにとって入手〕可能な情報がすべて掲示されています。誰でも入室できて、そこで情報を得たり、冊子を持ち帰ったりもできます。グループで座って話しあうこともできますし、情報講座（Informationskurs）も開かれます。そもそも、この事務所はすでに自由な学校なのです。[26]

１．２．２ 自由国際大学の推進協会

1971年２月10日、ボイスはクラウス・シュテック、エルヴィン・ヘーリヒとともに、ケルンの美術展示会の運営方針に反対する声明を発表した。民間の画商団体である「進歩的ドイツ画商協会（der Verein progressiver deutscher Kunsthändler)」という組織が、４年前からケルン市当局による支援を受けて、この展示会での独占的な作品販売権を手中にしていたためである。ボイスたちが発表した声明では、行政当局の不当な干渉と特定の組織による独占状態を排除して、自由な美術市場と制作者自身によって開催される自由なメッセを実現せよ、という要求が示されたのだが[27]、この主張は「自由な大学（Freie Hochschule)」の構想から派生したものであった。つまり、展示・仲介（販売）というコミュニケーション行為においても、教育・学習というコミュニケーション行為と同様に、外的干渉や上下関係のない自由な流動性が不可欠であるという考え方であった。

同年11月１日、「自由な大学のための委員会（das Komitee für eine Freie Hochschule)」[28]を立ち上げたボイスは、その後、西ヨーロッパの多くの博物館、美術館、文化センター等でこの新しい大学の構想と必要性、自身の教育観、〈拡張された芸術概念〉に関する講演を何度も繰り返した[29]。

翌1972年の春に、デュッセルドルフ市内の老朽化したメッセホールが使用されなくなることを知ったボイスは、そのホールを活用して州政府の管轄から独立した新しい「芸術アカデミー」を創設しようと構想し――学生数が増えすぎて狭くなった本来の芸術アカデミーの教室空間を拡張したい、という思惑もあったようだが――、その推進協会であり、ＦＩＵの前身ともなる「登録団体・創造性と学際的研究のための自由国際大学（Freie Internationale Hochschule für Kreativität und interdisziplinäre Forschung e.V.)」を、先の委員会を母体として設立した[30]。しかし、この芸術アカデミー拡張計画は結局実現しなかった[31]。このときの顛末について、ボイスは次のように語っている：

> メッセホールの件については、地方議会の議員たちがラウ〔＝科学大臣ヨハネス・ラウ〕と会合して、私たちのプロジェクトを支持するつもりはないと共同決議したのです。この計画

---

[25] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.26-27.

[26] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.11.

[27] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.144.

[28] Götz Adriani u.a.: *Joseph Beuys*. DuMont Reise Verlag, Köln 1994, S.123.

[29] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.144.

[30] この登録団体が、のちにＦＩＵの資産管理等に関する法的権利義務が帰属するＦＩＵの法人となる。

[31] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.28.

に政治的理念が付随していると気付いた瞬間、彼らは反対を決めたに違いないんです。〔…〕そうでなければ、あのメッセホールを私たちに提供しないなんて理解できませんよ。実際、あれはほとんど取り壊し寸前の状態で、市当局にとっては何の価値もないものだったのですからね。[32]

旧メッセホールを再利用して独立するという計画はこうして失敗に終わったものの、このとき設立されたＦＩＵ推進協会は、デュッセルドルフ市内の事務所を本部として、引き続き自由大学構想の周知活動に努めることとなった。

１.２.３ ドクメンタ５

その後、1972年６月30日から10月８日までカッセルで開催された第５回ドクメンタ（documenta 5)[33]において、ボイスは展示会場内にデュッセルドルフの「事務所」をそのまま再現した「作品」を出品し、毎日（すなわち100日間）そこに居続ける、というアクションを実演した。事務所内には、積み上げたパンフレットの束と一輪の薔薇を活けた花瓶が置かれた机事務、ボイスがいつも体操選手のようにぶらさがっていたという大きな体操用鉄棒、７枚の石盤――そのうちの１枚には「人間（Mensch)」とだけ書かれていた[34]――が配置され、窓には「国民投票による直接民主主義を支持する組織の事務所（Büro der Organisation für direkte Demokratie durch Volksabstimmung)」と記されたネオンサインが灯された。

展示会に関する記録によると、毎日、多くの人々が――ときには１日で811人もの来訪者が――この「事務所」を訪れ、ボイスに質問したり、ボイスと議論を交わしたり、意見を述べたりして帰っていった。ボイスは、国内外からやってきた大勢の聴衆に向かって、直接民主主義の必要性を訴える熱弁を100日間にわたって振い続けたというわけである[35]。さらに、この展示会でボイスに対してとりわけ多くの拍手を送ったのは、女性の訪問客であったという。なぜなら、事務所の壁には男女同権を訴える次のようなメッセージが掲げられていたからであった：

我々は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州で、国民投票によって立法化されるべき重要な法的問題に関わる国民請願を準備している。我々が提案しているのは男女同権である！ 20年間の政党支配は、いまだにこの〔女性の〕基本的人権を実現できないでいる。さらに、家事仕事を職業として承認することも提案する。〔…〕女性たちに真の自由を！[36]

このようなドクメンタ５での展示作品に関して、「政治的意図だけでなく、何らかの芸術的意図もあると考えていいのか？」と問われたボイスは、次のように回答している：

なぜなら、未来をどうするか、という真に政治的な意思は、芸術的なものであるべきだから

---

[32] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.40.

[33]「ドクメンタ」は、1955年からドイツのカッセルで４～５年ごとに100日間にわたって開催されている国際現代美術展で、「国境なき展覧会」などとも呼ばれる。東西ドイツが統一されたら、そこがほぼ中央に位置することになるから、という理由でカッセルが開催都市に選ばれた。

[34] この「人間」と書かれた石盤は、檻の向こう側にいる動物の名前を示す、動物園によくある掲示を想起させる。非人間的社会のなかで、「ここに人間がいます」という皮肉なメッセージを発したものだったと推測される。

[35] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.127-128.

[36] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.140-141.

です。つまり、そうした意思は〔本来であれば〕人間の創造性から、個々人の自由から生まれてしかるべきものなのです。したがって、ここで私が取り組んでいるのは、もっぱら〔その自由を教える〕学校の問題、教育学なのだということになりますね。だから、これは自由のモデル、革命的な自由のモデルなのですよ。〔…〕国家の干渉から自律した学校制度がなくてはならないはずであるのと同様に、国家の影響を受けない自由な新聞、自由なテレビ放送なども、なくてはならないものであるはずです。〔…それらが存在しうるような〕自由の空間〔Freiheitsraum〕において革命が成立し、それを通じて民主主義の基本構造と〔…〕そして経済構造が変革されていくのです、〔…現在のような〕少数の人間の私的利益に奉仕するものではなく、人々の要求に応えるものへとね。〔…〕私は、これを芸術だと思っていますよ。[37]

こうして、〈別なふうでもありえる〉というオルタナティブな思想が意味するものと、人々の意識やコミュニケーションの変革が〈教育の自律性〉の実現と表裏一体であることが、ＦＩＵの基本理念を〈芸術〉として提示したこの作品によって、多くの来訪者に伝えられることになった。文字通り、〈社会を教育＝形成〉する〈社会彫刻アクション〉を実践したことで、ボイスは多くの人々の理解と共感を得ることに成功したのである。しかし、この挑発的アクションの成功は、その反面で、ボイスの意図を理解しない人々の敵意と憎悪をさらに掻き立てることにもつながっていた：

ボイスが、挑発的ではあるけれども事実に即して「芸術」と、つまり、本当の意味で現代にふさわしい「芸術」と呼んだ、この世界中から注目された公開アクションによって、それまで以上に多くの政治的な進歩派勢力がこの組織の周囲に集まってくることになったわけですが、これはまた同時に、ドクメンタの終了後〔…〕、ボイスが科学大臣ヨハネス・ラウから〔…〕デュッセルドルフ芸術アカデミー教授職の即時解雇通告を受ける、という結末をももたらしたのです。[38]

１．２．４ アカデミー事務局占拠と解雇通告

ドクメンタ５の終了後、10月10日にデュッセルドルフへ戻ってきたボイスは、すぐに〈教育の自律性〉を追求する次の一歩を芸術アカデミーにおいて実行した。それは、正当な理由なくアカデミーへの入学を拒否された54名の入学志願者とともに、入学許可と教育制度の是正を要求して「アカデミー事務局を静かに占拠する」という、州科学省に対する挑発的な抗議アクションであった[39]。前年度の10月15日にも、17名の入学志願者とともに今回と同様の占拠アクションを実行し、若者たちの入学を事務局に承認させていたボイスは、今回もまた「基本法〔＝憲法〕は、各人が学校制度において自由に人格を形成する権利を認めているし、教育の機会均等を認めてもいる。だが、今回の件がこれに反していることは明らかである」と主張して、行政当局による教育活動への不当な干渉を拒否する姿勢をあらためて示したのである[40]。

これに先立つ10月６日、州科学省の政務次官から「規定数以上の学生を受け入れないように」と

---

[37] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.128.

[38] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.27.

[39] この学期には352名の入学志願者がいたが、そのうちの127名が、たんに「定員オーバーである」というだけの不平等な理由から入学を認められなかった。そこでボイスは、すでに８月28日の時点において、これらの志願者をすべて自分のクラスに受け入れることを宣言していた。

[40] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.131.

いう要請文書が届いていたものの、ボイス本人がこれを受け取ったのは、すでに入学志願者たちとともにアカデミー事務局内への「静かなたてこもり」を開始していた10月11日であった。そして同日、州科学大臣ヨハネス・ラウの署名で即時解雇を通告する10月10日付けの文書が、さらにボイスのもとに届けられたのである[41]。

表面的には、ボイスが解雇を通告されることになった原因は、「アカデミー事務局占拠」という挑発的アクションの過激さ、〈拡張された芸術概念〉にもとづく逸脱した〈教育活動〉にあったと判断するのが妥当である。しかし、その背後には、二度までも管轄当局の命令を無視して学生を入学させようとした徹底不服従の姿勢、アカデミーの伝統と権威を否定して独自の学校運営を貫徹しようと試みる反権威主義、代表民主制を否定する学外での数々の政治的活動――自然環境保護を訴えて幾たびも議会や行政の決定を覆したアクションの数々も、ここに加えることができるであろう――などといった、この最終局面にいたるまでの一連の挑発的な〈社会彫刻＝教育活動〉によって掻き立てられた官僚的反感が、すでに幾層にもわたって蓄積されていたことは間違いない。この点は、上記のシュテュットゲンの見解からも充分に読み取れる。実際のところ、芸術アカデミーの内部にさえも、ボイスとドイツ学生党の「議会制民主主義に対する明らかな敵意」[42]を危険視すると公言し、さまざまな機会を捉えてボイスを辞職に追い込もうと画策した教授が何人も在籍していたのである。

それでも、ジャーナリズムを通じて広く世間に知れわたったこの「ボイス罷免事件」は、州行政当局の強引な措置に反対する激しい連帯運動を各地で次々と発生させることになった。ボイスを支持する学生たちが反対デモや街頭での署名活動を繰り返し、著名な文筆家や芸術家たちは連名で解雇撤回を要求する声明を発表した。州科学省の庁舎内は国内外から送られてきた抗議の書簡や電報で溢れかえり、さらに、ニューヨーク、ロンドン、アムステルダム、バーゼル、ローマの各都市では、解雇通告への反対決議を求める運動が起こされた。こうして各地でさまざまな反応を引き起こしたこの罷免事件は、結果として、〈教育の自律性〉という理念を社会に広める重要なメディアの役割を果たすことにもなったのだった。

一方、解雇通告の違法性と無効を主張したボイス本人は、デュッセルドルフ地方労働裁判所に州科学省を告訴したのであるが、実はその間に、入学を拒否されたはずの志願者たちが正式にデュッセルドルフ芸術アカデミーへの学籍登録を果たしていた。つまり、ボイスが実現を要求した案件の内容がそもそも「合法」であったことは、司法の判断を待つまでもなく、この段階ですでに証明されていたわけである[43]。

その後、芸術アカデミーという教育実践の場を奪われたボイスは、アカデミー校門前の路上で学生たちの作品を添削しながら裁判を継続していた。そこで、ボイスを支持する芸術アカデミーの教員数名が、同年12月18日、ボイスのクラスを含めた合同クラス（der Klassenverbund）を創設して共同で学生指導を担当する、という声明を発表した：

---

[41] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.130-131.

[42] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.118.

[43] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.131-134. ただし、このとき追加入学を認められた学生たちには、「副専攻を芸術アカデミーではなくデュッセルドルフ大学で履修すること」という条件が付けられていた。

ボイス教授はこの合同クラスにフリーの教師として参加する。合同クラスの目的は、アカデミーの学生たちのために教員の一人としてヨーゼフ・ボイスに働き続けてもらうこと、学生指導を複数教員で共同担当することによって、さらに大きな教育的効果を得ることである。[44]

また、翌1973年２月21日の地方労働裁判所の公判では、ついに州科学省に対して、ボイスへの即時解雇通告を取り消すことを命じる判決が下された。

このように、ボイスをアカデミー教授として復帰させるに充分な条件が内外に揃っていたにもかかわらず、州科学省は３月28日、今度はボイスとの雇用契約期間が満了する「1973年９月30日までの期限付き解雇通告」という方法によって、再びボイスをアカデミーから遠ざける選択をしたのである[45]。これは、ボイスが数年ごとの契約更新によって継続的に教授職に任用されていたことを「悪用」した措置であった。

１.２.５ ルドルフ・シュタイナーの思想

ボイスは、この新たな対抗措置に対してさらなる法廷闘争を続けつつ、３月30日から５月13日まで、ハノーファーで数名の芸術家と『政治闘争における芸術（Kunst im politischen Kampf)』と題する展示会を開催した。ボイスの展示作品は、先のドクメンタ５と同じ「直接民主主義のための事務所」であったが、今回はそこに「自由な大学」に関する告知資料が追加展示されていた。また、室内の壁には人智学の創始者ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861-1925）のポートレートが掛けられ、よりよき社会への変革を提言したシュタイナーの著書が一般閲覧用として展示されていたという[46]。正確に記録されてはいないものの、ここで展示された書物は、おそらく1919年に刊行されたシュタイナーの『現代と未来を生きるのに必要な社会問題の核心（Die Kernpunkte der sozialen Frage in den Lebensnotwendigkeiten der Gegenwart und Zukunft)』ではなかったかと推測される。なぜなら、ボイス自身が先のドクメンタ５において、「多くの人々に対して、たとえばルドルフ・シュタイナーの『社会問題の核心』を読むべきだと助言することはできるのです」[47]と語っているからである。

芸術アカデミー時代の末期に、ボイスがこのシュタイナーの「社会有機体三層化論（die Lehre der Dreigliederung des sozialen Organismus)」――人間の社会を精神（文化)・政治・経済という三領域からなる有機体と捉え、これにフランス革命の自由・平等・友愛という理念を加えて、精神活動においては自由＝自治（Selbstverwaltung）を、政治活動においては平等＝民主主義（Demokratie）を、経済活動においては友愛＝公益（Gemeinnützigkeit）を原則としつつ、これら三領域が有機的に結びつくことで歪みのない健全な社会が形成されるとする思想――から多くの影響を受けていたことは、ボイス自身の発言からもはっきりとうかがえる。しかし、その影響の方向性について具体

[44] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.134. 共同声明に参加した教授・講師は、R.ガイガー（Rupprecht Geiger)、E.ヘーリヒ（Erwin Heerich)、H.ホライン（Hans Hollein)、E.カスパー（Ernst Kasper)、O.J.ポフルセン（Ole John Povlsen)、G.リヒター（Gerhard Richter)、A.トムキンス（André Thomkins)、W.ヴァルナッハ（Walter Warnach)、K.ヴィンメナウアー（Karl Wimmenauer）などであった。

[45] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.134.

[46] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.134.

[47] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.26.

的に確認できるようになったのは、芸術アカデミーでの教育実践においてではなく、〈自由な大学〉という理念を掲げて〈社会形成〉の問題に取り組みはじめてからであった[48]。ボイスはドクメンタ５での聴衆との対話において、「私たちは自由で民主的な社会主義〔の実現〕を達成したい。つまり、私たちは何か新しいことを提案したいのです。西側の私的資本主義も、東側の国家資本主義も、ともに克服していけるような何かをね」と語って、〈第三の道（der dritte Weg)〉という考え方を展開した。これが、現行の社会体制への対案、オルタナティブとしての、〈三層化した社会有機体〉というシュタイナーの思想と結び付いていったのである[49]。

この三層からなる〈自由で民主的な社会〉を形成するための基軸となるのは、いうまでもなく精神活動の自由、すなわち、創造性の領域における「積極的な自由」の実現である。このためボイスは、やはり先のドクメンタ５での対話において、この自由を実現する際の起点となる「〈教育の自律性〉を備えた新しい学校」を求める活動に取り組んでいることを明らかにしている：

> 私たちのところには、画一的（uniform）であろうとする官立の学校制度（Staatsschulwesen）が存在します。つまり、中央集権制へと向かい、国家権力の管理下に入ろうとする学校制度です。そして、私たちはこれに反対しているのです。オルタナティブで多様な学校制度を求めて活動しているのです。少しずつでもいいから、学校を自治（die Selbstverwaltung）へと、学校のなかにいる人々による自治へと移行させたいのです。学校の自治は、そこで教えている人々と学んでいる人々によって行なわれるのが原則です。[50]

オルタナティブな教育機関と〈教育の自律性〉とを求めるこうした主張から、次の「ＦＩＵの創設宣言」までは、あとほんの一歩であった。そして、その最後の一押しをする重要な役割を担ったのは、皮肉なことに、規則と権限に執着して〈別なふうであること＝逸脱〉を容認しない官僚主義の圧力、すなわち、州科学省によるボイスへの解雇通告であった。

２．初期の活動とＦＩＵマニフェストの発表

ＦＩＵの理念を掲げる以前から、ヨーゼフ・ボイスは社会的・教育的問題の直接解決をめざした数々の〈社会彫刻アクション〉を実行していたが、いくつかの例外――環境保護アクションや直接民主主義を促進するためのアクションなど――を除けば、それらの多くは、やはり「デュッセルドルフ芸術アカデミー」というひとつの教育機関の存在と切り離せないものであった。しかし、その芸術アカデミーを逐われ、ＦＩＵ創設の構想を公開してからのボイスの活動は、当然のように、芸術アカデミーという境界を大きく越え出て、より激しくオルタナティブな社会の実現を追求するものへと変化することになった。ボイスは、世界各国の人々とともに、社会と人間が〈別なふうでもありえる〉ことを実践を通して訴える方向へと踏み出したのである。

本章では、まず、正式なマニフェスト発表前にＦＩＵに独自の方向性を与えることになったと思

---

[48] 人智学の創始者であるシュタイナーのこの思想は、のちにヨーゼフ・ボイスを経由して緑の党の設立理念に取り込まれることになった。なお、シュタイナーは1919年に「経済の活動には社会主義、法律と国家の活動には民主主義、精神の活動には自由あるいは個人主義という三層化された社会有機体の実現が達成されなければ、人類は、もはや互いに語り合うこともなくなってしまうであろう」と述べている。Vgl.Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.28.

[49] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.26.

[50] Harlan u.a.: *Soziale Plastik*, S.28-29.

われるボイスの２つの活動の意味を確認し、その後、マニフェストの検討へと進むことにしたい。

２．１ 第三の道

1973年８月９日から13日にかけて、アッハベルク国際文化センター（das Internationale Kulturzentrum Achberg, 略称ＩＮＫＡ、1971年開設）において「‘第三の道’常任年次会議（Ständiger Jahreskongreß ‘Dritter Weg’）」を設立するための会合が催された。ここには、ヨーゼフ・ボイスに加えて、著名な人物としてはオシップ・K.フレヒトハイム（Ossip K.Flechtheim, 1909-1998、法律家・政治学者、ベルリン自由大学教授）、レーア・テンゲス・ストリンガリス（Rhea Thönges- Stringaris, 1934-、芸術史家、1972年「直接民主主義を支持する組織」に参加）、オータ・シク（Ota Šik, 1919-2004、元チェコスロバキア副首相、「プラハの春」主導者であった経済学者・画家）、ミキス・テオドラキス（Mikis Theodorakis, 1925-、20世紀ギリシャを代表する音楽家、左派政治家）などが参加していた[51]。

〈第三の道〉という概念は、一般的には、対立する２つの制度や思想が存在する状況において、双方の長所のみを組み合わせた新たな未来状況を構想し、その実現をめざす政治思想を意味している。したがって、「第三の道を選択する」と言ったとき、それは多くの場合、国内の政策決定における「中道的な政治路線の選択」として理解される。たとえば、独占資本主義と集権的社会主義の両者を否定しつつ、一方では資本主義の価値（私的所有、市場原理、企業家精神など）を保持しながら、他方では社会主義的価値（社会的公正、社会保障制度、教育や文化への公的支援など）を国家政策として進めるような社会体制を志向する政治思想などが、これに相当する。

しかしながら、ボイスたちが示した〈第三の道〉は、こうした国内政治に関わる案件とは異なる次元を志向するものであった。国際色豊かで多彩な顔ぶれが揃ったこのアッハベルクでの会合は、「西側と東側の支配的な社会体制およびその策謀と対決する意思を持ち、〈第三の道〉という構想を練り上げたいと考える、すべての人々の意見交換のための自由なフォーラム」[52]と理解されていた。つまり、さまざまな国籍と経歴をもつ参加者たちは、ここにおいてはじめて、〈第三の道〉という意識を国際的に共有することで互いに連帯する可能性を確認し、真に民主的な「新しい世界」を志向することになったのである。

この会合が開かれたＩＮＫＡは、その後、シュタイナーの社会有機体三層化論を実践的に追究するフォーラムへと発展した。そこでは、現在のＮＰＯやＮＧＯといった組織の先駆となるような、資本主義でも共産主義でもない独自の方針で運営される種々の非営利事業共同体や、いわゆる市民銀行――福祉事業や環境保護、再生エネルギー、地域活性化、女性起業家支援などを融資対象とする、生活協同組合や一般市民が出資者および運営主体となった自由な貸金事業、「エコバンク」とも呼ばれる――などが設立され、社会変革のための実践モデルが次々と示されることになった。また、このフォーラムを中心として「行動・第三の道（Aktion dritter Weg）」と呼ばれる活動団体も結成され、緑の党創設の際には、ＦＩＵとともに「アッハベルク・サークル（Achberger Kreis）」としてその創設メンバーに加わることになった。

---

[51] Adriani u.a.：*Joseph Beuys*, S.137.

[52] Adriani u.a.：*Joseph Beuys*, S.137.

２．２ アメリカ旅行と意識Ⅲ

1974年１月９日から19日にかけて、ヨーゼフ・ボイスはアメリカ合衆国への初めての旅行に出かけた。ニューヨークの画廊経営者ロナルド・フェルドマン（Ronald Feldman）が、ボイスのためにニューヨーク、シカゴ、ミネアポリスの芸術学校での「社会彫刻に関する連続講演」を企画したのである。ヴィリ・ボンガルトとの対談のなかで、ボイスはこのときの講演の成果について次のように述べている：

> 芸術が、マルクス主義のテーゼとは違って上部構造なんかではなくて、「正しく理解すれば」あらゆる社会的行為の基礎となっている、あるいはなるべきであるってことを、少なくとも関心を持ってくれた少数の人々には、はっきり伝えることができたんじゃないかな。[53]

また、このときに出会った自由な雰囲気のアメリカの若者たち、ウーマン・リブ（women's liberation）――1960年代から公民権運動、反戦運動、学生運動と結びついて活発化していた女性解放運動――の代表者たちから受けた印象に関して、次のように語っている：

> アメリカの若者たちは、たとえばドイツの若者と比べると、ぜんぜん攻撃的でも急進的でもないように見えたね。〔ドイツの若者よりも〕はるかに市民的で、おまけにずっと鷹揚で、新しい思想を拒否しない姿勢があった。言ってみれば、親しい仲間内のパーティのような陽気な雰囲気だったのさ。〔…〕私が出会ったアメリカ人たちに関しては、絶望感とはまったく無縁だという印象をもったよ。〔…〕
> それ〔＝女性解放運動の代表者たちとの会合〕は、私にとってかなり重要なことだった。アメリカの女性は潜在的な政治力をもっているから、人々がそれに期待したのだという印象を受けたよ。でも、彼女たちがどんなふうに自由になりたいのか、それが私にはわからなかったな。筋の通った包括的な理念は見出せなかったんだ。[54]

ここで重要なのは、この講演旅行を通してボイスがアメリカ合衆国の聴衆に何を伝えたかではなく、逆に、アメリカの陽気な若者たち、力強い女性解放運動家たちから何を得てきたか、ボイスがアメリカで接触し、感じ取ったのは何であったのかという点である。端的に言うと、それはアメリカの若者世代の間で広がりはじめていた「新しいタイプの意識」であった[55]。ボイスは、それまで西ドイツ（あるいは西ヨーロッパ）の学生たちからはほとんど感じたことのなかった新しい意識のあり方、同時代のアメリカの社会学者チャールズ・A.ライク（Charles A.Reich, 1928-）によって「第三のタイプの意識」、すなわち「意識Ⅲ」と名付けられたものが生み出した、新しい〈人格〉[56]に接触したのである。

ライクによると、「1960年代のなかば、少数の人間たちにはじまり、その後いっそう急速に数を

---

[53] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.138.

[54] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.137-138.

[55] ウーマン・リブに関しては、当時は女性団体ごとに追求する問題領域がそれぞれ異なっており、その主張も多岐にわたっていたため、全体としてそこに「包括的な理念」を求めるのは無理があったと考えられる。しかし、少なくとも性的平等を社会的に実現するために、ウーマン・リブでは、とりわけジェンダーに関する意識変革が重視されていたことを強調しておきたい。

[56] 「人格」概念の詳細については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育思想」37-43頁を参照。

増してゆき、驚くべき奇跡的な現象として、アメリカ統合国家という硬化した土壌から、意識Ⅲが芽を吹いた」[57]。この新しい意識は、文学・芸術・演劇・哲学などを学んでいた学生たちの間で少しずつ形成されはじめ、その後、普通の中産階級の学生たちに伝染し、最終的には広く若者たちの間で共有されることになったという：

> 単純にいってなにが起こったのか。この現象によって、数ヶ月の短期間に、あらゆる点で古くさかったある学生が、ヘアースタイル、服装、習慣、関心、政治的姿勢、他人との関わり方、つまり、生活様式全体を変えたのである。その学生は新しい意識〔＝意識Ⅲ〕に転換したわけだ。[58]

このような意識Ⅲの中核を構成したのは、既成の秩序や体制、権威主義的人間関係、他律的目標の追求、旧世代の価値観や主義主張などからの全面的な〈解放〉という思想であった。換言すると、自分自身の文化、価値、生き方は、各人が自由に生み出すものだという考え方である。さらにこの思想の延長上には、人々が新しい意識へと転換することによって、暴力的手段を用いたり政治権力を掌握したりすることなく社会変革を実現しうるという、新たな希望も生まれていた。そして、その変革の出発点となるのは、個々人の多様な〈自己〉のあり方を承認することであった：

> 自己を起点にするといっても、それは利己主義を意味するのではない。権力とか地位とかいったような統合国家の人工的な産物を前提にするのではなく、人間的生命とその他の自然を基底にした前提からの出発を意味するのだ。〔…〕意識Ⅲの人間は〔…〕他人を競争する相手とは見ない。人間は互いに兄弟であり、世界は誰にとっても充実した場なのだ。〔…〕すべての人間は一定の基準ではかられるべきだと主張することをやめ、新しい世代は、それぞれの自己のうちにある特異な要素に価値を与えるのだ。[59]

ライクによってこのように評価された〈人格〉を形成する意識Ⅲは、デュッセルドルフ芸術アカデミーでボイスの指導を受けていた学生たちに頻繁に見られた競争意識、出世や成功を追求し、攻撃的かつ排他的な人間関係を生み出した意識とは、明らかに別種のものである[60]。もちろん、アーヘン工科大学でのアクション実演中に激高してボイスの顔面を殴打した学生[61]とも、また、特定の主義主張や政治思想――自由主義であれ、社会主義や共産主義、無政府主義、あるいは国家主義であれ――を自らの信念として掲げ､それらに奉仕する急進的な若者たちの場合とも明らかに異なる。ここに認められるのは、個々人の違いを受け入れて尊重し、連帯するという意識、生命と自然を貴ぶ意識が生み出した新しい〈人格〉なのである。しかも、この意識Ⅲの〈人格〉には、こうした連帯感を支えるもうひとつの重要な特徴があった：

> ひとつの特質が意識Ⅲの生活様式の全側面を統一している、つまりエネルギーである。それ

---

[57] チャールズ・A.ライク『緑色革命』早川書房, 1971年, 228頁。

[58] ライク『緑色革命』235頁。

[59] ライク『緑色革命』237頁。

[60] デュッセルドルフ芸術アカデミーの学生たちが示した攻撃的人格や対立関係については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1968－1972」39-42頁、および「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1964－1967」31-33頁を参照。

[61] この事件については Richard Ermen: *Joseph Beuys*. Rowohlt, Hamburg 2007, S.53-54 を参照。

は、高揚した熱意、幸福感、希望のエネルギーである。[62]

ボイスがアメリカ合衆国で遭遇したのは、このような意識Ⅲへの転換を果たし、これまでとは別のやり方がありうると考える自律した精神をもって、古い世代が権威に従属することで忘れ去った〈自己決定性〉を新たに獲得できた若者たちであった。この意識Ⅲが、〈拡張された芸術概念〉にもとづいてボイスが提唱する人間のあるべき姿、〈自由に思考する創造的人間〉ときわめて類似した特徴を備えていることは明らかである。こうした若者たちからなる聴衆を前にしては、おそらくボイスも、得意の〈挑発（Provokation)〉[63]を行なう必要性をほとんど感じなかったに違いない。

ここで、意識Ⅲがそれ以前の〈意識〉とどれほど異なるかを明確にするために、チャールズ・A.ライクがこれに先行するものとして位置づけた、アメリカ合衆国における古い世代の二つの意識タイプである意識Ⅰ・Ⅱの特徴と、その発生の契機について概略を確認しておきたい。

意識Ⅰが生み出した〈人格〉は、「発明と機械と生産が進歩と等価物であり、物質的成功が幸福への道であり、自然は美しいものではあるが、征服され利用されねばならない」と考え、「競争が自然と人間の法則であり、人生とは、個人的利己主義の厳しい追求」であるとみなす[64]。この意識Ⅰの信条は、ヨーロッパの身分社会から逃れてアメリカに入植した人々にその源流をもち、現在もなお広範な層のアメリカ人を包含するが、その問題点が明確に現れ出たのは、この信条が産業主義を支える科学・技術の発展と競争的市場経済の拡大に取り込まれた19世紀のことであった。つまり、伝統的な利己主義にもとづく意識Ⅰと強力な「技術と市場の力」とが結合した結果、一種の「集産主義」とでも呼びうるような、組織・能率・規律・支配・計画といったものの価値を重視する、合理主義の権化たる〈企業精神の人格〉が出現したのである。この〈人格〉が抑圧的な管理体制と特権階級――ロックフェラー、ヴァンダービルト、カーネギー、フォード、ハリマンなどに代表される、アメリカ的理想の破壊者である大企業――を生み出し、その巨大な私的権力が自然と人間の環境に荒廃をもたらすとともに、社会に腐敗と不平等を招くことにつながった[65]。

意識Ⅱは、この意識Ⅰの利己的個人主義が近代産業社会においてもたらした、悲惨な失敗とでも呼ぶべき事態に対する拒絶反応として生じた。利己的個人主義を否定せねばならないという社会的・心理的要請に応えて、意識Ⅱは、制度・組織・集団・権威・社会などに「自己をうわまわる優位性」を認める。そうした自分を越えるものに自分自身の運命を委ね、また自分の意思を従属させるべきだと考えるのである。この意識Ⅱが形成した〈人格〉は、職業や肩書き、名声、および組織や社会の内部における互いの競争的地位に大きな関心を抱き、「能力と実績にもとづく能力主義社会（メリトクラシー）を重視」するものであった[66]。これが一種の権威主義的人格であることは間違いない。そして、その最も重要な特性は：

> 自分の組織が行なうことや、自分の社会が行なうことに人間的責任を負わないことである。〔…〕つまり、個人的判断はできないし、社会の前提をすべて受容しなければならない人間

[62] ライク『緑色革命』246頁。
[63] 〈挑発〉という概念についての詳細は、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1961－1963」18頁を参照。
[64] ライク『緑色革命』31頁。
[65] ライク『緑色革命』33-46頁を参照。
[66] ライク『緑色革命』67-77頁を参照。

として〔自分自身を〕考える。〔…〕これはたんに責任を拒む姿勢ではない。独立して考えることの拒否でもあるのだ。[67]

意識Ⅱの〈人格〉を備えた人間は、このように「自ら思考する」ことを放棄しているため、必然的に外部から与えられる情報に大きく影響される存在となる。このため、巨大広告産業やマスメディアを通じて行なわれる他律的な欲望形成・意識操作をほとんど無批判に受容し、それらを自らにとって価値あるものと見なしさえする。さらに、この意識Ⅱに対して永続的に影響を及ぼすために権力機構がとりわけ注力するのは、種々の教育機関である。つまり、意識Ⅱの人々の社会では、既成の秩序・体制・文化の維持を重視する価値観を権威主義的人間関係のもとで再生産する教育のコミュニケーション、これにそぐわない見解は排除するという教育のコミュニケーションが、既存の権力機構のもとで、きわめて効果的に継続されていくのである。「その結果、意識Ⅱの大部分は“虚偽意識”、つまり国家の目的のため、国家によって押しつけられた意識」[68]となる。

アメリカ合衆国における意識Ⅲの若者たちは、この「社会によって押しつけられた“虚偽意識”をふるい落とす努力」[69]を開始し、「自然環境と文化環境を破壊した利己的個人主義に発する意識Ⅰ」および「既存の秩序と権威を重視する価値観にもとづく意識Ⅱ」によって形成された旧世代の〈伝統的人格〉に代わる〈対案的人格〉を求めて、新しい自己規定を行なう存在として社会に登場した。そして、このオルタナティブな意識Ⅲを備えた若者たちとの接触は、ボイスのその後の活動にも少なからぬ影響を及ぼすことになった。

２.３ ＦＩＵのマニフェスト

アメリカ旅行から帰国した１ヶ月後となる1974年２月、ボイスはハインリヒ・ベル（Heinrich Böll, 1917-1985、1972年度ノーベル賞作家）、ゲオルク・マイスターマン、ヴィリ・ボンガルト、クラウス・シュテックをはじめとする多くのメンバーとともに作成した、ＦＩＵの活動方針を宣言する正式なマニフェストを発表した。その文面は、一般市民の理解を妨げぬようにという配慮からか、ボイス特有の説明概念を使用することを避けながらも、ボイスのそれまでの経歴を随所に反映しつつ、のちに展開される諸々の活動の方向性を明示した内容となっている。本節では、このマニフェストの要点をボイスの教育思想に沿って順に確認していくことにしたい。

マニフェストでは、はじめに、ＦＩＵの主要な目的は人間の創造性を多面的に――つまり、伝統的な狭い意味での芸術分野に限定することなく――育むことである、という点が強調される。これは、ボイスが芸術アカデミーで取り組んできた、〈拡張された芸術概念〉にもとづく教育活動の原点でもある：

創造性は、旧来の芸術分野において発揮されるものだけに限定されません〔…〕。すべての人々には潜在的に創造力が備わっていますが、それは、競争や成功を強いる〔心理的な〕攻撃によって〔顕在化を〕遮られています。こうした潜在能力を探り出して育て上げることが、この学校の使命となるのです。創造には〔…〕素材をうまくまとめあげる能力も必要であり、

[67] ライク『緑色革命』80-81頁。
[68] ライク『緑色革命』86頁。この「虚偽意識」は「イデオロギー」と置き換えることも可能である。
[69] ライク『緑色革命』268頁。

それは〔芸術分野以外にも〕社会的に重要な諸領域にまで広げて適用しうるものなのです。[70]

さらに、ＦＩＵに所属することになる多くの外国人との交流を通じた異文化体験と相互理解が、創造性を高めて視野を広げるためのひとつの方策として掲げられる：

外国人の創設メンバーは〔…この学校で得られるであろう〕創造的な刺激を期待しています。その際には、彼らが私たちから学ぶだけでなく、私たちが彼らから学ぶことが必要とされます。〔互いに異なる〕その生活様式や文化的伝統が、双方の創造性を呼び起こすのです。芸術についてだけでなく、〔…〕法律、政治、経済、学術、宗教といった、生活を構成するさまざまな事柄について〔互いの違いを〕比較せねばなりません。[71]

おそらくここには、ボイス自身が数々の異文化体験――芸術アカデミーでの外国人留学生指導、国際的な芸術家集団フルクサスへの参加、ヨーロッパ各地での講演、〈第三の道〉を追求する国際会議、アメリカ合衆国での意識Ⅲの若者たちとの接触など――を通じて「異なる他者の存在」について知り得ただけでなく、それが自らの属する文化・社会の特殊性をあらためて発見することにつながったという貴重な経験の成果が反映されている。「自分にとって最も身近なものこそ、最も分かっていないし、最も学びにくいもの」なのである[72]。構想当初の名称であった「自由な大学（Freie Hochschule)」に、途中から「国際（International)」の一語が追記されたのも、こうした認識が背景にあったからであろう。

他方で、創造性に対するさまざまな抑圧的攻撃を発生させている要因として、広範な社会領域への官僚主義・権威主義の浸透、世界中で破壊的に広がる大衆文化、民主主義精神の衰退、巨大コンツェルンによる独裁的な文化的・経済的支配などといった問題の存在が指摘される。これらは、先に見た意識Ⅱの〈人格〉によって形成された現行の社会体制特有の諸問題と重なってくる部分である。このマニフェストでは、さらに、そうした社会体制による攻撃で抑圧された創造性が、今度は民主的な共同体にとってきわめて有害な精神の退廃、犯罪、暴力を引き起こす源となっている、という告発の言葉が続く。そして、その精神の退廃をボイスは「内面世界の汚染」と呼ぶのである：

環境汚染（Umweltverschmutzung）と呼ばれる事態と並行して、内面世界の汚染（Innenwelt-verschmutzung）が進行しています。そこでは希望〔を持つこと〕が夢想や幻想であると非難され、こうして捨てられた希望が、新たな暴力を生み出しているのです。そこでこの学校では、武力や腕力によるものに限定することなく、数多くの暴力の形態についても追究していくことになります。[73]

武力や腕力以外に「暴力の形態」として数えられるのは、強引に遂行された無思慮な都市再開発、一部の人間だけを特権化する財政改革、極端に偏った私有財産（私的権力）の形成、収益と経費の損得勘定のみで行なわれる教育などといった政治的・経済的・社会的・文化的な暴力である。さらに、森林や河川、土壌、大気などの自然環境に対する数々の破壊的行為もまた、抑圧から生じた危

[70] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.139.
[71] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.139.
[72] エドワード・T.ホール『文化を超えて』ＴＢＳブリタニカ, 1993年, 60頁。
[73] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.139-140.

険な暴力や犯罪として分類される。そして、こうした〈暴力〉の発生を回避するために、ＦＩＵが「連帯の意識（das Bewußtsein der Solidarität)」を育て上げるべき「語りあいの場所」となることが強調される：

> この学校の〔連帯意識を育てる〕活動は、〔各参加者が〕相互に影響を与えあうこと（die Interaktion）で成立します。教える者と学ぶ者が区別されるような制度はありません。この学校では業務を一般公衆に公開して、公衆の管理下（unter Kontrolle der Öffentlichkeit）でこれを行なっていきます。[74]

ここで示唆されているのは、ボイスが芸術アカデミー時代に到達した〈振動する学習の原理（das oszillierende Lernprinzip)〉[75]、すなわち、各参与者が〈教育者〉と〈学習者〉の立場を流動的に交替させることで相互に気付きを引き出しあうことが可能になる、という学習原理である。ＦＩＵでも、教育のコミュニケーションにおいて上下関係を発生させることなく、自由な意見交換を通じた相互理解と連帯意識の育成を促進する、という基本方針が明示されたわけである。さらに、この学習原理にしたがって進められるＦＩＵの活動は、教育機関というひとつの閉じた組織内で完結するものではなく、ＦＩＵの外部へと公開・拡張され、〈社会の教育＝形成〉として、つまり〈社会彫刻〉の制作として行なわれること、また、関心を抱く市民の意向が充分に反映されるものとなることが謳われている。かつて芸術アカデミーで掲げた〈教育の自律性〉の確保と〈自由で民主的な社会〉の形成を同時に実現するという構想を、ＦＩＵにおいては、より実践的な形式で追求することが表明されたのである。

マニフェストの最後では、こうした基本方針に則って活動を展開していくことになるＦＩＵの根本的な存在意義が語られる。それは、民主主義の潜勢力（ポテンシャル）を掘り起こし、これを支援して、本来あるべき姿をこれに与えること、潜在状態にある民意を顕在化するための「フォーラム」として機能することであるという：

> 広告産業、政治のプロパガンダ、文化企業、マスメディアなどによる〔情報と意識の〕操作が増えつつある世界にあっては、名のある人々ではなく、無名の人々（die Namenlosigkeit）にこそ、〔ＦＩＵのような互いに自由に語りあうための〕フォーラムが与えられねばならないはずなのです。[76]

ここでは、〈拡張された芸術概念〉から導き出されたＦＩＵの２つの使命が含意されている。ひとつは、抑圧的な社会体制からの脱却をめざす〈直接民主主義〉あるいは〈草の根民主主義〉を強力に推進すること、もうひとつは、これに賛同する一般市民のコミュニケーションセンターとなること――より多くの人々の意識を、いわゆる「意識Ⅲ」のような自律的モードへと転換していける場となること――である。

そもそもボイスにとって、言語を介した自由な思考の交換（自由な語りあい）を通じて互いに新

---

[74] Adriani u.a.：*Joseph Beuys*, S.140.

[75] 前原「ヨーゼフ・ボイスの教育実践1964－1967」50-53頁を参照。

[76] Adriani u.a.：*Joseph Beuys*, S.140.

たな概念の形成・表現を行ない、それぞれの自己を形成していくというプロセスは、〈拡張された芸術〉の起点であると同時に、高度に創造的な教育と学習のプロセス、すなわち、自己の新たな社会的展開（＝キャリア）の可能性を見出していくための方法を学ばせる〈教育的コミュニケーション行為〉そのものであった。そこで、芸術アカデミーでは学生中心の小規模な「円座討論会」として実践されていたこの独自の〈教育的コミュニケーション行為〉を、今度は、広く市民に開かれたＦＩＵにおける教育と学習の基本形式として位置づけ、これを真の民主主義を育成していくための基盤とすることが最後に宣言されたのである。

以上がＦＩＵのマニフェストの概略である。そこには、一般に想定されるような教育研究機関であれば掲げているであろう教育理念・教育方針に類する内容は、ごくわずかしか含まれていない。発表された文言の表面的な意味だけをたどったときに、このＦＩＵのマニフェストが全体として示すのは、むしろ、社会体制の構造的矛盾や危機的状況の解決をめざそうとする、一種の進歩的な政治活動団体の姿である。しかし、ボイス自身の教育理念という観点から捉え直すと、このマニフェストからは別のメッセージが伝わってくる。それは、自分自身の〈教育者〉としての役割、その〈人格〉に課せられた社会的責務についてのボイス自身の理解、つまりは〈教育者〉としての使命感である。「人間の創造力を育て上げ、いずれは自由で民主的な社会を形成する」という〈拡張された芸術概念〉にもとづくその〈教育者〉の使命を、このマニフェストの文脈に沿ってより一般的な表現で言い換えるならば、それは、全体としての社会システム（＝社会全体）を構成している既存のコミュニケーション行為を、ＦＩＵにおける創造的な〈教育的コミュニケーション行為〉によって全面的に置き換えること、とでもなるであろうか。

たとえばボイスは、〈経済システム（経済的コミュニケーション行為)〉もまた、〈創造性〉とこれにもとづく〈生産行為〉〈消費行為〉という観点から捉えるべきものと主張する。このとき、貨幣（Geld）は資本（Kapital）ではなく、たんに〈経済システム〉の作動を「法的に調整する役割」を担うものとしてのみ位置づけられ、一切の経済的価値を与えられない。真の経済的価値を有する「資本」と見なされるのは、個々人が有する創造的な〈能力（Fähigkeiten)〉と、それを用いて生み出した〈成果（Erzeugnisse)〉である。このとき、各人がその〈能力〉をどのように投入するかを自らの意志で決定すること（＝真の労働）こそが、その〈成果〉の優れた品質を保証することにつながる。つまり、ボイスが想定する〈経済システム〉においては、〈貨幣〉ではなく〈創造性〉が固有のコミュニケーション・メディアとなるのである。また、これにともなって、〈経済システム〉には賃金への依存関係も、雇用者（Arbeitgeber）と被用者（Arbeitnehmer）の区別も不要なものになるという。こうした考え方にしたがって、ボイスは「芸術＝資本（Kunst＝Kapital)」という定式を示してもいる[77]。

ところで、〈社会システム〉を構成する〈コミュニケーション〉が別種のものに変化するということは、これに参与する個々人のインターフェイスである〈人格〉が変化することでもある。そしてこの変化は、その〈人格〉の振る舞いを規定する人間の〈意識システム／心的システム〉の変化を前提とする[78]。つまり、人間の意識が変われば――もちろん、〈意識システム〉が作動するメカニズムについては相変わらず不透明なままではあるけれども――社会も変わるのである。そのような

[77] Vgl. Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S. 13-19.

[78] 〈コミュニケーション行為〉、インターフェイスとしての〈人格〉、〈人格〉と〈意識（心的）システム〉の関係については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育思想」37-40頁を参照。

社会変革をもたらす可能性を秘めた「意識の転換」の実例を、ボイスはアメリカ講演旅行の際にすでに体験していた。それが意識Ⅲの〈人格〉を備えた学生たちである。チャールズ・A.ライクは、当時、この意識Ⅲの学生たちが歩みつつあった社会変革の道を次のように描写している：

> 法律的手段も、力による政治活動も〔…〕権威主義的な支配が確実に進行しているのを阻止することはできない。〔…変革をもたらす〕力（パワー）というものは、〔…〕新しい価値と新しい生活方式の力をさすのである。〔…〕意識なるものは、激烈な力なしで、政治的力の掌握なしで、現存の人間集団のどれも顛覆させないで、統合国家の変革や破壊を行えるのだ。新しい世代は、意識レベルでの行動による実験で、こんにちの後期産業社会で有効に働くようなひとつの変革方法――意識を変革すること――への道を示して見せたのである。〔…〕革命というものは文化的でなければならない。なぜなら、文化が経済的・政治的機械をコントロールするのであり、その逆ではないからだ。〔…新しい文化を生み出す〕意識Ⅲの真髄はズボンの形にあるのではなく、その意識が示す解放、目標の変革、自己の探求、誠実と責任の理論にあるのだ。既成体制はそれらを飲み込んだまま、安全でありうるはずがない。[79]

このようにライクが強調する意識Ⅲの新しい「文化のパワー」を、ボイスの言葉で言い換えるならば、それは「芸術のパワー」、すなわち〈拡張された芸術〉を形成する創造力ということになる。「芸術があらゆる社会的行為の基礎となっている、あるいはなるべきである」とは、ボイス自身がアメリカの学生たちに語った言葉であった。そして、芸術アカデミーで実践していたその創造力を育てる〈教育的コミュニケーション〉を社会全体において展開していくこと、「権力を取らずに世界を変える」という新しい意識を育てることが、ＦＩＵの使命とされたわけである。

なお、「意識の変革を通して世界を変える」というこの考え方は、21世紀現在、新たな表現形式をとって再び主張されている。とりわけ注目されるのは、アイルランドの社会学者ジョン・ホロウェイ（John Holloway, 1947-、メキシコ・プエブラ自治大学教授）がその著書『権力を取らずに世界を変える（Change the world without taking Power)』において示唆している「否定の否定」という立場、自己決定を否定する権力機構を否定して、世界が〈別なふうでもありうる〉ことを追求する立場である。ホロウェイの見解では、「社会的に自己決定へ向かって動いていく力」を起動するための出発点は、「拒むこと、従順にならないこと、服従しないこと、命令に従わないこと、ノーと言うこと」[80]であるという：

> 他者によって決定されるのを拒むということは、それ自体のなかに、自己決定へ向かっていく力を含んでいるのです。〔…〕ノーはイエスの――本当にたくさんの〔可能性としてのみ想像できる、よりよき状態に対する〕イエスの――意味をもっているのですが、そのたくさんのイエスは、現実に存在している社会に対するノーに根をもっているのです。〔…〕多くのイエスを含んだノーは、立ち向かいながら乗り越えていこうとする動きです。[81]

こうした見解は、「現実に存在している権力機構や社会体制の否定」という点では、C.A.ライクが分析した意識Ⅲやボイスの教育理念と基本的に同質である。ただし、両者には異なる点もある。

---

[79] ライク『緑色革命』319-327頁。
[80] ジョン・ホロウェイ『権力を取らずに世界を変える』同時代社, 2009年, 420-421頁。
[81] ホロウェイ『権力を取らずに世界を変える』421-422頁。

ホロウェイがその反権力思想の立脚点としたのは、メキシコ革命時の農民解放運動にその源流をもつサパティスタ民族解放軍の活動であり、アメリカ合衆国や西ドイツに存在するような成熟した市民社会ではなかった。それゆえにホロウェイは、ボイスたちが選択肢として人々に示した新しい生き方、新しい価値観、直接民主制の実現や第三の道などといった具体的なオルタナティブを提示するにはいたっていない。むしろ、「来ることが絶対ないかもしれない未来を待つことはできない」[82]という立場から、乗り越えた先にあるかもしれない何かよりも、立ち向かいつつ乗り越えるという行為それ自体、すなわち、より強固な現状否定こそが必要であると主張するのである。とはいえ、ホロウェイの提示する〈多くのイエスを含んだノー〉という観念が、〈別なふうでもありえる〉という考え方の新たな側面を開示するものであることは間違いない。

３．ＦＩＵのプロジェクト

すでに確認したように、ＦＩＵは、教員と学生が所定のカリキュラムにしたがって教室内で「授業」という教育のコミュニケーションを実現するような「普通の大学」ではなかった。そのかわりにＦＩＵの〈教育的コミュニケーション行為〉として採用されたのは、ボイスをはじめとするＦＩＵ関係者が中心となって公益的なプロジェクトを立ち上げ、有志市民も多数参加して、共同体レベルでこれを遂行するという形式であった。つまり、現実の社会を教育現場としながら、プロジェクトを推進する共同体そのものが全体として学習し、成長することを目的とする、いわゆる〈プロジェクトベース学習（project-based learning, 略称ＰＢＬ)〉である。

本章では、こうした形式で実践された社会的活動を含めて、ＦＩＵとの関連でボイスが行なったいくつかの〈社会彫刻アクション〉の意味を検討していく。

３．１『100日間の自由国際大学』

マニフェスト発表後１年あまりの間に、裁判を続けながらドイツ国内のみならず世界各地で展示会・講演会を開催したボイスは、積み重なった疲労のせいか、1975年５月末に心筋梗塞に襲われ、３ヶ月あまりの療養生活を余儀なくされた。このため、ＦＩＵ関連で具体的な行動が開始されたのは1976年に入ってからであった。

最初のアクションは「国際芸術家委員会（das Internationale Künstlergremium, 略称ＩＫＧ)」の創設である。1976年１月14日、ボイスとクラウス・シュテックが発起人となり、30名ほどの世界的に著名な芸術家・芸術評論家がケルンに集まって、文筆家にとっての「国際ペンクラブ」と同様の役割を担う「芸術家のための国際協会」を立ち上げたのである。この組織は、芸術の自由を求める芸術家の主張を擁護し、これに必要な支援を与えること、また、芸術振興のための国際的に有効な指針を定めることを目的としていた。

さらに同年12月、バーゼルでこの協会の最初の年次会議が開催された際に、ボイスは「芸術家と国家（Künstler und Staat)」と題する講演を行ない、「将来、創造性を育む自由な学校や大学で教育された芸術家は、〔社会と無縁な〕自分の自由空間、その見せかけの自由のなかに姿を隠すので

[82] ホロウェイ『権力を取らずに世界を変える』422頁。

はなく、そこから歩み出てくるのです」[83]と語り、自由な大学の存在意義をあらためて世界の芸術家に向けて訴えた。

こうしたＩＫＧでの活動と並行して、同年５月、ボイスは南ドイツを中心に政治活動を展開していた小規模政党「独立ドイツ人行動同盟(Aktionsgemeinschaft Unabhängiger Deutscher, 略称ＡＵＤ、のちに緑の党に合流した組織)」から、無党派候補としてドイツ連邦議会選挙に立候補した。当選はできなかったものの、この選挙活動中、ボイスは「連邦議会議員の半数を女性に」というスローガンを掲げるとともに、次のような主張を行なった：

> 創造性は国民の財産である！ 自由な文化を！
> 私はそのために闘います、国家に従属しない自由な学校、自由な大学のために！[84]

その後、12月にケルンでＦＩＵ推進協会の会議が開催され、そこで「創造性と学際的研究のための自由国際大学をダブリンに創設する件についてのヨーロッパ経済共同体への報告」と題された発表が行なわれた。ダブリンのＦＩＵが、これから長く続いていくであろう各地の自由国際大学開設計画の第一歩となることが大々的に告知されたのであった。またこの間に、デュッセルドルフとダブリン以外にも、ロンドンとベルファストに新たなＦＩＵ推進協会が創設されていた。こうして国際的な支援と充分な活動資金を得る目処を付けたボイスは、翌年に控えたドクメンタ６で「自由な大学」を演出するための計画を立てることができた[85]。それが『100日間の自由国際大学』と題された、ＦＩＵとしての最初の公式な〈社会彫刻アクション〉である。

1977年６月24日から10月２日まで開催されたドクメンタ６では、『作業場の蜂蜜ポンプ（Honigpumpe am Arbeitsplatz)』と題された室内インスタレーション[86]の内部で、『100日間の自由国際大学』の「朝から晩まで続くゼミナール（ein permanentes Seminar von morgens bis abends)」[87]、100日間連続してゼミを開講するというプロジェクトが実行された。そしてこのゼミナールには、シュテュットゲンが記しているように、多種多様な分野で自由・平等・民主化の実現を追求し続けている人々がゲスト講師として招待された：

> ボイスは、いくつかのオルタナティブな活動グループ、政治的抑圧を受けた少数民族の代表者や亡命者たち、迫害を受けた人々、ルーカス･エアロスペース社（Lucas Aerospace）の職場委員連合代表団、それに何人もの学者、医師、音楽家、画家、彫刻家、ジャーナリストたちなど、世界各地から多くの先導者をこの公開会議に招待しました。人類の運命に関わる諸問題を話しあうために永続的に開催される制度化されたオープンな国際会議、という理念のモデルをここで示したのです。[88]

---

[83] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.150, S.155.

[84] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.28.

[85] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.150, S.156.

[86]『蜂蜜ポンプ』は、展示空間内に樹脂製のチューブを張り巡らせ、そのチューブ内に「生命のシンボル」あるいは「循環するエネルギー」と見なされる蜂蜜を途切れなく電気ポンプで循環させるという巨大なインスタレーション作品である。

[87] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.30.

[88] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.30.

このように多彩なゲストが次々と登壇し、各自の問題状況とその解決へ向けた取り組みについて報告しつつ、ＦＩＵメンバーや多くの来訪者と論じあうフォーラムが、社会彫刻アクション『100日間の自由国際大学』であった。これは、まさしく芸術アカデミーで行なわれていた「円座討論会」の大規模拡大版である。

参与者の意識を変える〈教育のコミュニケーション〉という観点から眺めると、多彩な登壇者のなかでもとりわけ注目に値するのは、イギリスの軍事企業ルーカス・エアロスペース社の従業員代表団である。この企業では、従来までトップダウンで運営されてきた会社組織の改革案として、作業現場の従業員からなる職場委員会によって、1975年に「ルーカス・プラン」と呼ばれる対話型の直接民主主義的マネジメント手法が開発されていた。これは、自社のより良い未来のために、また社会にとっての有益性という観点から、各部門の職場で働く労働者が協働して新製品を企画・開発・販売することを企業運営の基本方針とするという、組織のボトムアップ化構想であった。

このプランでは､各職場から上がってきた多数の製品企画が職場委員会によって集約されたのち､アンケート形式で再び各職場へと回送され、そこで従業員たちが遂行の是非を――企画された製品の効果的な販売方法を考えるマーケティングや、企画遂行に必要とされる技術を各従業員が新たに習得するためのトレーニング計画なども含めて――あらためて検討するものとされた。そして、翌1976年にプランの詳細が公開されると、そのオルタナティブな組織運営方法が「社会における技術発展の民主化（the democratisation of technological development in society)」として注目を浴びることになったのである[89]。

さらに､こうして「職場を身分階層的でないチームへと再編成する(re-organising work into less hierarchical teams)」プランに沿って企業活動を進めることにより、個々の従業員は、自身の属する企業のマネジメントに直接関与しているという参加意識を高めるだけでなく、その企業が果たすべき道義的・社会的責任についても自発的に大きな関心を抱くことになる。Ｃ.Ａ.ライクの表現を借りるならば、これは、従業員の意識モードを意識Ⅱから意識Ⅲへと転換させる大胆な実験ということになるであろう。あるいは、こうして実現される〈意識の転換〉を一種の〈学習の成果〉と見なすならば、このルーカス・プランの実践は〈プロジェクトベース学習（ＰＢＬ)〉の究極の一形態であるともいえる。つまり、〈学習者〉として自社の課題解決プロジェクトに共同参加するルーカス・エアロスペース社の従業員は、ほかの従業員とコミュニケーションをとりつつ、「既有知識を総動員して新たな知識〔＝業務遂行に必要な技能〕を主体的に構成していくことによって、学習内容を深く学ぶ」[90]という学習プロセスを進行させることができたわけである。この学習プロセスが、「個人レベルでの知識・技能の獲得」という伝統的な意味での学習と本質的に異なるのは、それが共同体への参加によってのみ進行するものだという点である。ＰＢＬにおいては、問題解決を通じて学習・成長・変容するのは個人ではなく、〈社会システム〉としての共同体それ自体なのである。

---

[89] 参照ＵＲＬ：http://www.theguardian.com/science/political-science/2014/jan/22/remembering-the-lucas-plan-what-can-it-tell-us-about-democratising-technology-today. なお、このプランを遂行した結果、ルーカス・エアロスペース社では短期間のうちに150以上の公益的製品の開発に成功したという。

[90] Ｒ.Ｋ.ソーヤー編『学習科学ハンドブック』培風館，2009年，250頁。ＰＢＬの詳細については、鈴木敏江『プロジェクト学習の基本と手法』教育出版，2012年を参照。また、いかなる社会関係・状況が効果的な学習プロセスを発生させるかという問題については、ジーン・レイヴ他『状況に埋め込まれた学習』産業図書，1993年を参照。

対話・連帯・公益を重視して社会変革を求めるボイスの〈拡張された芸術概念〉、あるいは、語りあい、傾聴しあいながら相互に概念形成を行なう「円座討論会」に象徴される〈振動する学習の原理〉と同質の理念にもとづいて策定されたルーカス・プランは、ＦＩＵのゼミナール参加者にとっても非常に説得力があるオルタナティブの実例だったはずである。しかもこのゼミナールでは、プロジェクトの推進によって構成員の意識転換、組織運営の民主化、公益に資する活動の実現が同時に可能であることを、プラン開発の当事者との対話を通して直接学ぶことができたのである。

こうした国内外からの招待者との対話のほかに、７月30日から８月８日のゼミナールでは、「第三の道・人権と社会秩序／現行の体制に対するオルタナティブの必要性について」というテーマでアッハベルク・サークルの年次会議が開催された。この会議において、ボイスはゲスト講師としてＦＩＵに参加していたルーディ・ドゥチュケ（Rudi Dutschke, 1940-79、1960年代末の学生運動の指導者）とはじめて直接対話する機会をもった。このときボイスとの親交を深めたドゥチュケは、その後、事故によって39歳で死を迎えるまでの間、人々の意識転換と社会変革のための組織となるべき「緑の党」の創設に向けて、ボイスとの共同作業を続けることになった[91]。

さらにこのドクメンタ６では、『100日間の自由国際大学』と並行して、ダブリンのＦＩＵによるプロジェクト『北アイルランド・ワークショップ（Workshop Nordirland)』が開催された。このワークショップは、名目上は、北アイルランドの個性豊かな国土と住民、習俗、芸術、文化、象徴、産業などに関する情報を各地からの来訪者に伝えるための企画と位置づけられていた[92]。しかしながら、実際には、独立を求める民族運動が激化したために、イギリス政府による武力介入・直接統治という事態を招いてしまった北アイルランドの現状について、さらには、自治独立と民主主義の実現という政治問題について、広く国際世論を喚起することを意図した企画だったと考えるべきであろう。

このドクメンタ６が終了してからおよそ１ヶ月後、ボイスはボン芸術協会で「芸術概念の拡張：自由国際大学」と題する講演を行ない、そこで自身の「アクション」という方法に関して次のように述べている：

> そもそも、すべて〔＝ボイス自身の芸術・教育のすべて〕は固定できないアクションという芸術に含まれています。アクションは任意の場所で行なわれます、多くの場合は路上ですけど。〔…〕報告されていないアクションもかなりありますよ。でも、しっかり実行されて、それなりの成果を上げています。[93]

この発言のとおり、専用にあつらえられた発表会場においてだけでなく、街角や路上、森林、湿原、湖岸、アカデミー、自分の事務所など、ボイスはあらゆる場所で〈社会彫刻アクション〉を実践していた。つまり、ボイスはこれをどのような場所でもなしうる〈芸術（＝教育的コミュニケーション行為＝社会形成)〉の形式と考えていたのである。とはいえ、そのようなボイスにとっても、

---

[91] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.31. ＦＩＵでは、このドゥチュケのために、特別な研究室・講座を用意することまでもが計画されたという。しかしその計画は、ドゥチュケの死があまりにも早すぎたために実現しなかった。

[92] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.149-150.

[93] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.160.

「ドクメンタ」という美術展は間違いなく〈社会彫刻アクション〉のための特別な機会であった。先のドクメンタ５では、直接民主主義と教育の自由・自律の必要性を訴えるアクションを演出して注目を集め、またドクメンタ６では、その主張を発展させたＦＩＵの理念をさらに具体化し、盛大なゼミナールを開講することができた。このように独自の〈教育的コミュニケーション行為〉を３ヶ月以上にもわたって継続し、世界に向けて公開できる国際現代美術展「ドクメンタ」は、〈芸術〉を〈社会の形成＝教育〉と見なすボイスにとって、最高のパフォーマンスを発揮できる特別な舞台であった。そして、この「ドクメンタ」がもつ可能性を充分に心得ていたボイスは、５年後のドクメンタ７において、さらに壮大な〈社会彫刻アクション〉に取り組むことになる。それがＦＩＵの『7000本の樫の木』プロジェクトである。

３．２ 『オルタナティブへの呼びかけ』

1978年４月７日、上級審であるカッセルの連邦労働裁判所が「ノルトライン＝ヴェストファーレン州科学省によるボイスの解雇措置は違法である」という内容の判決を下した。この司法判断を受けて、ヨハネス・ラウの後任として州科学大臣に就任していたライムート・ヨヒムゼン（Reimut Jochimsen, 1933-1999）は11月４日、ボイスに対して「アカデミー教授」の称号と「芸術アカデミーのアトリエ（３番教室)」を使用する権利を認めると発表した。ここにおいて、州科学省とボイスはようやく和解にいたったわけである。そしてこのとき、国家権力による干渉を断固として否定する「自律した教育研究機関」であったＦＩＵが、その本拠地を「官立の教育機関」であるデュッセルドルフ芸術アカデミーの内部に有するという、一種の逆説的な状況が出現することになった：

> 私はアカデミーに自分の部屋を取り戻しました。そしていまは、自由国際大学のために働いています。大学ではあるけれども、今度は〔国家のではなく〕私自身のです。〔…〕おかしなことに、それはアカデミーのなかに作られたのですよ。すべてが奇妙なことです、つまり、この「自由国際大学」という学校がそこにある、ということがです〔…〕。[94]

しかしながら、ヨハネス・シュテュットゲンが記すように、それはボイスが作り上げてきた独特な教育理念を精確に体現した状況でもあったことは確かである：

> ＦＩＵがたどってきた発展の道筋の原点を表象する、この奇妙ではあるけれども明快な状況、それは、デュッセルドルフのアカデミーでヨーゼフ・ボイスが行なってきた、過去の教育者としての仕事から生まれたものなのです。[95]

こうして自らのいるべき場所へと戻ることになったボイスは、ここでさらに大きなアクションをはじめることになった。その開始宣言とでも呼ぶべきものが、有名な『オルタナティブへの呼びかけ（Aufruf zur Alternative)』[96]、1978年12月23日に全国紙である『フランクフルター・ルントシャウ（Frankfurter Rundschau)』紙上で発表された、世論に社会変革を訴える長大な声明文である。この声明文は、1979年６月のヨーロッパ議会（当時のヨーロッパ共同体ＥＣの主要機関）選挙に際して、

---

[94] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.179. ただし、ボイスが芸術アカデミーの授業を担当することはもうなかった。

[95] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.41.

[96] Joseph Beuys: *Aufruf zur Alternative*. FIU-Verlag, Achberg 1979.

ＦＩＵから10ページのパンフレットとして復刻され、緑の党から立候補したボイスの出馬声明として再配布された。このため、パンフレットに記された「ヨーゼフ・ボイス」という名前の横には「緑の党のヨーロッパ候補（Europakandidat der Grünen)」と追記されている（[図１］参照)。ただし、この段階では、緑の党はまだ正式にひとつの政党として成立しておらず、実際にボイスが所属したのは「その他の政治団体－緑の党（SPV－Die Grünen)」という名称の連合組織であった[97]。

Beuys Aufruf zur Alternative

Erstveröffentlichung in der Frankfurter Rundschau vom 23.12.78

Joseph Beuys (Europakandidat der Grünen)

Aufruf zur Alternative

Dieser Aufruf richtet sich an alle Menschen des europäischen Kultur- und Zivilisationskreises. ES GEHT UM DEN DURCHBRUCH IN EINE NEUE SOZIALE ZUKUNFT. Wie ist dieses Ziel erreichbar? Dadurch, daß in den europäischen Zonen eine Bewegung entsteht, die durch ihre Erneuerungskraft die Mauern abträgt zwischen Ost und West und die Kluften zuschüttet zwischen Nord und Süd.

Der Anfang wäre schon gemacht, wenn - sagen wir - die Mitteleuropäer sich entschließen würden, in der Gedankenrichtung dieses Aufrufes zu handeln. Wenn wir heute in MITTEL-EUROPA anfingen, einen den Zeitforderungen gemäßen Weg des Zusammenlebens und Zusammenarbeitens in unseren Staaten und Gesellschaften einzuschlagen, hätte dies eine starke Ausstrahlung auf jeden anderen Ort der Welt.

Vor kopflosem Umsteigen möchten wir warnen. Vor der Frage: WAS KONNEN WIR TUN? muß der Frage nachgegangen werden: WIE MÜSSEN WIR DENKEN?, damit der phrasenhafte Umgang mit den höchsten Idealen der Menschheit, die alle Parteiprogramme heute verkünden, nicht weiterhin sich fortpflanzt als Ausdruck des krassen Gegensatzes zur Lebenspraxis der wirtschaftlichen, politischen und kulturellen Wirklichkeit auf der Welt.

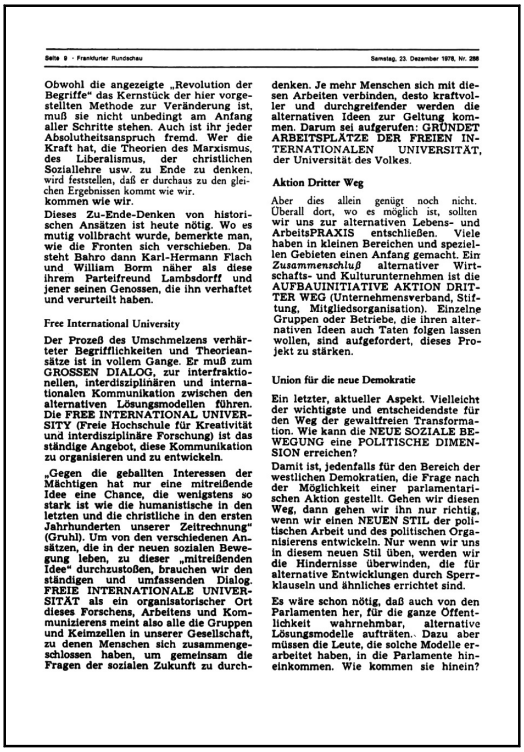
Beginnen wir mit der SELBSTBESINNUNG. Fragen wir nach den Gründen, die uns zur Abkehr vom Bisherigen Anlaß geben. Suchen wir nach den Ideen, die uns die Richtung der Umkehr weisen.
Überdenken wir die Entwicklung, die das gesellschaftliche und politische Leben im 20. Jahrhundert genommen hat.
Überprüfen wir die Begriffe, nach denen die Verhältnisse im Osten und im Westen eingerichtet sind.

Besinnen wir, ob diese Begriffe unseren sozialen Organismus und seine Wechselbeziehungen zu den Naturgrundlagen gefördert, zur Erscheinung eines gesunden Daseins geführt oder die Menschheit krank gemacht, ihr Wunden geschlagen, Unheil über sie gebracht haben und heute gar ihr Überleben in Frage stellen.
Gehen wir durch sorgfältiges Beobachten unserer eignen Bedürfnisse der Überlegung nach, ob die Prinzipien des westlichen Kapitalismus und des östlichen Kommunismus offen sind aufzunehmen, was aus dem Entwicklungsstrom der neueren Zeit als der zentrale Impuls im Seelischen der Menschheit sich immer deutlicher regt und als Wille zur konkreten Selbstverantwortung sich ausdrückt; und das meint: als Mensch nicht mehr eingespannt zu sein in ein Verhältnis von Befehl und Unterwerfung, Macht und Privileg.

Wir haben diese Fragen manche Jahre hindurch mit Geduld verfolgt. Ohne die Hilfe vieler anderer Menschen, denen wir in diesem Forschen und Erfahren begegnet sind, wären wir wohl nicht zu den Antworten gekommen, die in diesem Aufruf mitgeteilt werden. Daher bringen wir hiermit nicht nur »unsere Meinung« zur Sprache, sondern das, was zahlreiche andere auch erkannt haben.

Damit aber die notwendige Umkehr herbeigeführt werden kann, muß die Zahl der Einsichtigen vergrößert werden. Der Aufruf hat sein Ziel erreicht, wenn es gelungen ist, das hiermit Angeregte auch politisch-organisatorisch zu verdichten und schließlich in einer KONZERTIERTEN AUSSERPARLAMENTARISCH-PARLAMENTARISCHEN AKTION zum Einsatz zu bringen.
Also: GEWALTFREIE REVOLUTION FÜR EINE AUF ZUKUNFTSOFFENHEIT ANGELEGTE EVOLUTIONÄRE ALTERNATIVE.

［図１］ オルタナティブへの呼びかけ（１頁目）



Seite 9 · Frankfurter Rundschau — Samstag, 23. Dezember 1978, Nr. 298

Obwohl die angezeigte „Revolution der Begriffe" das Kernstück der hier vorgestellten Methode zur Veränderung ist, muß sie nicht unbedingt am Anfang aller Schritte stehen. Auch ist ihr jeder Absolutheitsanspruch fremd. Wer die Kraft hat, die Theorien des Marxismus, des Liberalismus, der christlichen Soziallehre usw. zu Ende zu denken, wird feststellen, daß er durchaus zu den gleichen Ergebnissen kommt wie wir.
kommen wie wir.

Dieses Zu-Ende-Denken von historischen Ansätzen ist heute nötig. Wo es mutig vollbracht wurde, bemerkte man, wie die Fronten sich verschieben. Da steht Bahro dann Karl-Hermann Flach und William Borm näher als diese ihrem Parteifreund Lambsdorff und jener seinen Genossen, die ihn verhaftet und verurteilt haben.

Free International University

Der Prozeß des Umschmelzens verhärteter Begrifflichkeiten und Theorieansätze ist in vollem Gange. Er muß zum GROSSEN DIALOG, zur interfraktionellen, interdisziplinären und internationalen Kommunikation zwischen den alternativen Lösungsmodellen führen. Die FREE INTERNATIONAL UNIVERSITY (Freie Hochschule für Kreativität und interdisziplinäre Forschung) ist das ständige Angebot, diese Kommunikation zu organisieren und zu entwickeln.

„Gegen die geballten Interessen der Mächtigen hat nur eine mitreißende Idee eine Chance, die wenigstens so stark ist wie die humanistische in den letzten und die christliche in den ersten Jahrhunderten unserer Zeitrechnung" (Gruhl). Um von den verschiedenen Ansätzen, die in der neuen sozialen Bewegung leben, zu dieser „mitreißenden Idee" durchzustoßen, brauchen wir den ständigen und umfassenden Dialog. FREIE INTERNATIONALE UNIVERSITÄT als ein organisatorischer Ort dieses Forschens, Arbeitens und Kommunizierens meint also alle die Gruppen und Keimzellen in unserer Gesellschaft, zu denen Menschen sich zusammengeschlossen haben, um gemeinsam die Fragen der sozialen Zukunft zu durchdenken. Je mehr Menschen sich mit diesen Arbeiten verbinden, desto kraftvoller und durchgreifender werden die alternativen Ideen zur Geltung kommen. Darum sei aufgerufen: GRÜNDET ARBEITSPLÄTZE DER FREIEN INTERNATIONALEN UNIVERSITÄT, der Universität des Volkes.

Aktion Dritter Weg

Aber dies allein genügt noch nicht. Überall dort, wo es möglich ist, sollten wir uns zur alternativen Lebens- und ArbeitsPRAXIS entschließen. Viele haben in kleinen Bereichen und speziellen Gebieten einen Anfang gemacht. Ein *Zusammenschluß* alternativer Wirtschafts- und Kulturunternehmen ist die AUFBAUINITIATIVE AKTION DRITTER WEG (Unternehmensverband, Stiftung, Mitgliedsorganisation). Einzelne Gruppen oder Betriebe, die ihren alternativen Ideen auch Taten folgen lassen wollen, sind aufgefordert, dieses Projekt zu stärken.

Union für die neue Demokratie

Ein letzter, aktueller Aspekt. Vielleicht der wichtigste und entscheidendste für den Weg der gewaltfreien Transformation. Wie kann die NEUE SOZIALE BEWEGUNG eine POLITISCHE DIMENSION erreichen?

Damit ist, jedenfalls für den Bereich der westlichen Demokratien, die Frage nach der Möglichkeit einer parlamentarischen Aktion gestellt. Gehen wir diesen Weg, dann gehen wir ihn nur richtig, wenn wir einen NEUEN STIL der politischen Arbeit und des politischen Organisierens entwickeln. Nur wenn wir uns in diesem neuen Stil üben, werden wir die Hindernisse überwinden, die für alternative Entwicklungen durch Sperrklauseln und ähnliches errichtet sind.

Es wäre schon nötig, daß auch von den Parlamenten her, für die ganze Öffentlichkeit wahrnehmbar, alternative Lösungsmodelle aufträten. Dazu aber müssen die Leute, die solche Modelle erarbeitet haben, in die Parlamente hineinkommen. Wie kommen sie hinein?

［図２］ ＦＩＵに関する言及（９頁目）

この連合組織を構成した下部団体は、３年前にボイスを連邦議会に立候補させた右派政党ＡＵＤ、ヘルベルト・グルール（Herbert Gruhl, 1921-1993、元キリスト教民主同盟の政治家）が主導した「緑の行動・未来（Grüne Aktion Zukunft、略称ＧＡＺ)」、ニーダーザクセン州で環境保護を訴えていた市民団体「緑のリスト・環境保護（Grüne Liste Umweltschutz)」、アッハベルクの「行動・第三の道」、そしてＦＩＵであった[98]。選挙の結果、「その他の政治団体－緑の党」の得票率は3.2％で、議席を獲得できる５％に届かなかったため、ボイスがヨーロッパ議会へ進出することは適わなかっ

[97] 'SPV'とは'Sonstige politische Vereinigung'（その他の政治団体）の頭文字からなる略称である。

[98] H.グルールはキリスト教民主同盟（ＣＤＵ）を離脱して環境保護を訴えるＧＡＺを創設、「ＳＰＶ－緑の党」創設時にはその中心メンバーのひとりとなった保守派の政治家である。このとき創設メンバーとして重要な役割を担ったもうひとりの人物が、ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）を離脱して「ＳＰＶ－緑の党」に加わった左派の政治家ペトラ・ケリー（Petra Kelly, 1947-1992、平和活動家、1959年から1970年までアメリカ合衆国で学ぶ）であった。このように保守・革新・右派・左派が混在し、さらに「右でも左でもない」ことを主張するボイスのＦＩＵ、「行動・第三の道」が加わって成立したのが新しい政治団体「緑の党」であった。

た[99]。しかし、この『オルタナティブへの呼びかけ』で示された社会変革を志向するボイスの理念は、1980年１月、カールスルーエにおける結党大会で正式に成立し、同年３月にザールブリュッケンの全国党大会で暫定綱領を採択した「緑の党」の基本的な活動方針として、あらためて掲げられることになった。つまり、この新しい政治団体の基本路線を明示した「綱領前文」に、ボイスの理念が全面的に採用されたのである[100]。ここでは、ボイスが発表したこの『オルタナティブへの呼びかけ』の概要と、ＦＩＵへの言及部分について確認していくことにしたい。

声明はまず、「来たるべき新しい社会へ向けたブレイクスルー（Durchbruch）」の必要性を訴えることからはじまる。このブレイクスルーは、ヨーロッパを東西に隔てる壁を崩し、南北に隔てる溝を埋めることによって成し遂げられるという。そのために「我々には何ができるのか、我々は何を考えるべきなのか」という問いに対して、ボイスは「我々は、自ら決定すること（Selbstbestimmung）からはじめよう」と回答する。さらに、「これまでのやり方」に背を向けねばならない理由をはっきりさせること、「反対方向へ進め」と指し示す思想を追求すること、命令・服従・支配・特権といった関係に搦め捕られた他律的状態から脱することを要請する。そして、直接民主主義の諸力を議会内外で結集したその先に、開かれた未来へと進化していくオルタナティブのための「非暴力革命（Gewaltfreie Revolution）」を位置づけるのである[101]。

しかし、「これまでのやり方」の何が問題なのか。ここでボイスは、「国家と貨幣」に起因する組織的な無責任体制から生じた４つの重大な危機の存在を指摘する。第一は「軍事的危機」である。膨大な量のエネルギーや天然資源、さらには無数の人間の創造力を注ぎ込んで、地球を何度も破壊できるほどの核兵器を作り続ける国家権力による危機、「人間の狂気」がもたらす危機である。第二は「環境の危機」である。西側の私的資本主義、東側の国家資本主義のいずれもが、貨幣を資本と見なす経済のために、世界中で自然環境を破壊しながら資源を収奪し続け、それが人間自身の生存環境をも脅かしているという危機である。第三に「経済の危機」がある。数百万人の失業者が生まれ、その能力を社会のために発揮できない状態にある。しかも、市場の法則にしたがうという名目のために、補助金を使って食糧を大量に過剰生産しながらそれを平然と廃棄している国々がある一方で、別の地域では何千人もの人間が日々餓死するという状況が世界的に出現している。そのうえ、こうした無意味な「富の消耗」が巧みに隠蔽され、巨大な多国籍企業の手にすべてが握られているという危機である[102]。

そして、最後に指摘されるのが「意識の危機」の発生である。多くの人々は、国家権力と経済権力が絡み合って見通しがきかない状況を前にして、何もできないという無力感を抱いている。得られるのは安っぽい娯楽産業によって提供される気晴らし程度という状況下で、自分が「生きる意味」を見出せずにいる。若者たちはアルコールやドラッグに溺れ、自ら命を絶つ者さえいる。このように人間が自分自身を見失っている状態と対をなして、さらに、自然環境（Umwelt）や同世代の他の人々（Mitwelt）、後代の人々（Nachwelt）にツケを回すことになるなどとは考えもせず、自分のた

[99] 永井清彦『緑の党 新しい民主の波』講談社, 1983年, 128-130頁。

[100] この綱領前文が、ＦＩＵとアッハベルク・サークルの産物であるのが「驚くべきことだ」と判断される場合もあるという。永井清彦『緑の党 新しい民主の波』139頁参照。だが、ここまで確認してきたように、ボイスの思想が「緑の党」の精神的主柱（支柱ではない、主柱である）となったのは必然であった。なお、この２回の全国大会にはボイス自身も出席している。

[101] Beuys: *Aufruf zur Alternative*. S.1.

[102] Beuys: *Aufruf zur Alternative*. S.2.

めだけに掴めるものを掴み取り、享楽を尽くそうとする人々の無責任な姿勢がある[103]。

これらの重大な危機――そのほかに、通貨の危機、民主主義の危機、教育の危機、エネルギーの危機、国家の正統性の危機などもあるが――を克服するためには、従来までのやり方を清算して、連帯を実現するオルタナティブへ向かうことが必要なのだとボイスは主張する[104]。そして、このオルタナティブへの転換を実現するための重要な手段のひとつとして、自身のＦＩＵの存在意義を次のように訴える。

非暴力的に社会を変革するためには､種々のオルタナティブな解決モデルを提案する人々こそが、党派の違いを越えて（interfraktionell)、学際的（interdisziplinär）で、国際的（international）なコミュニケーションを実現せねばならない。そうしたコミュニケーションを組織的に展開していける場所、人々が集まって社会の未来をともに考えていくための出発点、それがＦＩＵであるとボイスは明言する。このＦＩＵに集まる人々が多ければ多いほど、それだけオルタナティブの思想はいっそう強力なものになる。それゆえにボイスはＦＩＵを「民衆の大学（Universität des Volkes)」と呼び、その「民衆の大学が活動する場所をいくつも創り出そう」と訴えかけるのである[105]。

もちろん、ＦＩＵにおける教育的コミュニケーションだけでは危機を克服できない。上述した危機の克服には、「オルタナティブな生活と労働」を実践するための〈第三の道〉を選択することも必要である。さらに、上意下達で意思形成が行なわれる旧式の「政党を基盤とする政治活動」ではなく、さまざまな領域の市民運動を集合させる新しい形式の〈政治システム〉、すなわち〈多様性のなかの一致（die Einheit in der Vielfalt)〉を実現する「新しい民主主義」が求められるのである[106]。

このようなかたちで、社会のあらゆる領域が現在とは〈別なふうでもありえる〉と考えるボイスのオルタナティブの理念が公表されることになった。そしてこの理念が、ＦＩＵを含む多様な進歩的団体を「緑の党」というひとつの政治組織に統合する中核となったのである。

３．３ 緑の党（緑の人々）との関係

多様性のかたまりである「緑の党」という大きな〈社会彫刻作品〉をこうして完成させたボイスは、「デュッセルドルフ芸術アカデミー教授」の肩書きをもって、1980年の連邦議会選挙に同党のノルトライン＝ヴェストファーレン州比例名簿の最上位候補者として出馬することになった。このとき政界進出の道を選択したボイスの意図について､エドゥアルト・ボウカンプ（Eduard Beaucamp, 1937-、芸術評論家・ジャーナリスト）は次のように解釈している：

> ボイスの見解によれば、芸術がもつ創造と自由の可能性を、芸術家だけの特権としておくことは許されません。ボイスは、この基本理念を政治にも適用したのです。つまり、権力の行使と政治的決断を〔…〕政党と職業政治家だけの特権としておくことは許されない、という

[103] Beuys: *Aufruf zur Alternative*. S.2-3.

[104] ここまでのボイスの見解が緑の党の綱領前文に全面的に反映されている。

[105] Beuys: *Aufruf zur Alternative*. S.8-9.

[106] Beuys: *Aufruf zur Alternative*. S.9-10.「多様性のなかの一致」は、緑の党の中心理念のひとつである。この言葉が表象するのは、党員である個々人の多様な意志を消し去り、少数の人間で構成される執行部の見解で代表させることによって成立している、旧来の政党の意志決定方法を拒否する姿勢である。あるいは、従来型の〈政治的コミュニケーション行為〉を、ＦＩＵにおける〈教育的コミュニケーション行為〉で置換するための理念ともいえる。

ことなのです。〔…〕オルタナティブ運動の創始者の一人であるボイスは〔…〕、彼が社会の諸悪の根源（die Grundübel der Gesellschaft）と見なす「物質主義」と「利己主義」に対して聖戦（Kreuzzug）を仕掛けるつもりなのです。[107]

だが、ボイスはこの「聖戦」に勝利することができなかった。しかも、事態はたんに議席獲得に失敗したことだけでは済まなかった。緑の党の同志たちが、決選投票で敗北して落選したボイスの名前を比例名簿から即座に削除してしまったからである。その後、1983年の連邦議会選挙において、ボイスの名前は再びノルトライン＝ヴェストファーレン州選挙区の比例候補者名簿に復活した。しかし、それは当選の見込みがない「名簿下位の候補者の一人」としてであった。このためボイスは、名簿が公開されたその日のうちに立候補を断念してしまった。「環境問題は票になる」と考えて緑の党に集まってきた政治屋たちが、ボイスを政治の舞台から追い出してしまったのである。ボイスに関する評伝を著したハイナー・シュタッヘルハウス（Heiner Stachelhaus, 1930-2002、芸術評論家）の見解によれば、ボイスは「彼らにとって薄気味悪かったのだ。〔…〕政党を彫刻だなどと考えている人間を、いったいどんなふうに扱えばよいというのか。〔緑の人々にとってボイスは〕あまりにも奇異で、そもそも見当違いをしている」[108]人物だったという。

もしもこの見解が正しいならば、緑の党の代表者たちもまた、かつて職業政治家ヨハネス・ラウがボイスを芸術アカデミー教授職から解雇した際に、ボイスとの対話を「とんでもないことだね、私は、自分を芸術作品なんかにさせるわけにはいかんのだよ」[109]と発言して拒否したときと同じ眼差しで、ボイスという「奇異な人物」を眺めていたことになる。つまり、「緑の党から立候補する」というボイスの行為それ自体が、逸脱的パフォーマンスを好んで演じる前衛芸術家の「政治を舞台とした過剰な自己演出」と認識され、党是である〈多様性のなかの一致〉の枠内にさえ収まらないと判断されたことになる[110]。ＦＩＵにも所属し、「その他の政治団体－緑の党」では幹事長を務めた平和運動の主導者ルーカス・ベックマン（Lukas Beckmann, 1950-、のちに「緑の党」の中心メンバーとなる政治家）でさえも、「彼が伝えた言葉に含まれる革命の価値は、多くの人々とって、きっとよく分からないままだったにちがいない。彼の演説には、いつも彼自身の生き方の記録のようなものが混じっていたんだ」と述べて、政治家に向いていないボイスとは距離を置くようになったという[111]。

いずれにしても、このときの連邦議会選挙以後、ボイスが緑の党から選挙に出馬することはもはやなかった。自ら作り上げた〈社会彫刻作品〉を他者の手に委ねて、ボイス自身は政界に議席を得ようとする政治活動から離れたのだった。

---

[107] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.175.

[108] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.142.

[109] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.128.

[110] この見解の正しさは、緑の党の歴史を記述した多くの研究において、同党創設時のボイスの重要な貢献に関する指摘がほとんどない（ときには皆無である）ことからも裏付けられる。同党成立前に亡くなったルーディ・ドゥチュケの功績については頻繁に言及されているにもかかわらずである。緑の党の成立以前から、それどころか草の根民主主義や環境保護意識が社会に芽生える遙かに以前から、ボイスがオルタナティブ運動の先駆者・先導者として多彩な活動を展開してきたことを考えるならば、これはきわめて不当な扱いであると言わざるをえない。

[111] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.153.

３．４『7000本の樫の木』プロジェクト

緑の党の活動から離れはじめたボイスが、次のＦＩＵのプロジェクトとして推進することになったのは、「都市の統治に代えて都市の森林化を！(Stadtverwaldung anstelle von Stadtverwaltung!)」[112]という標語のもと、1982年の第７回ドクメンタのために計画されたエコロジーアクション『7000本の樫の木 (7000 Eichen)』であった。緑化された未来社会を指し示すモニュメント[113]となるべき7000本の樫の苗木――プラタナスや菩提樹、カエデもあったが――をカッセル市中に植樹し、苗木の隣には高さ約1.2メートルの玄武岩の石柱を立てていく、という壮大な都市森林化計画である。

第７回ドクメンタ開始日となる1982年６月19日に最初の１本が植樹され、最後の7000本目が1987年６月12日、すなわち第８回ドクメンタ初日に植樹されて完了するという、この５年がかりの大プロジェクトでは、開始から完了までの期間中に、誰もが自由にアクションの進行状況を把握できる方法が採用された。カッセル市内のフリードリヒ広場に7000個の石柱が積み上げられ、市内のどこかに苗木が１本植樹されるたびに、そこから石柱をひとつずつ持ち出して苗木の隣に設置していくことで、「石柱が減った分だけ植樹が進行している」ことが市民にもわかる、というわけである。そして、最初の樫の木が植えられたのが、そのフリードリヒ広場であった。

さらに、植樹された木を見る人々の眼前には、成長していく苗木と変化しない石柱の対照性、あるいは、樹木という「自然の有機物」とアスファルトで舗装された道路やコンクリート製の建造物という「人工の無機物」の都市空間内における経時的な「比率の変化 (Proportionsverschiebung)」が示され、それらが、生命の意味について人々が考えはじめるきっかけとなることも意図されていた[114]。もちろん、計画されたのはカッセル市内の森林化だけではなかった。カッセルの植樹が完了したら、次はその近隣諸都市、さらにはドイツ各地、中部ヨーロッパ各地、東西南北ヨーロッパの各地を、そして最終的には、世界のあらゆる場所を森林化していくことが想定されていた：

> この惑星の全体と、この惑星上でいま破壊され捨て去られている生命のすべてを巻き込んだ最大規模の「比率の変化」が〔このアクションによって〕開始されたのだということが、それまで〔＝各地が森林化されはじめるときまで〕には、明らかになっていることでしょう。地球上のあらゆる陸地で樹木が必要とされているのです。しかし、必要とされているのは木々だけではありません。木を植えることを、すぐにでも実行に移さねばならない対策のひとつと位置づける、そのような活力と表現形式を備えた理念〔を人々が形成すること〕こそが、何よりも必要とされているのです。[115]

ヨハネス・シュテュットゲンによって編纂された報告書『ヨーゼフ・ボイス・7000本の樫の木。ＦＩＵ活動報告書。ある芸術作品についての説明』には、植樹プロジェクトの指針がこのように記

---

[112] Johannes Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen. Ein Arbeitspapier der FIU. Beschreibung eines Kunstwerks.* 1982, S.2.

[113] 一般的な理解では、「モニュメント (Monument)」とは、過去の事件や故人に関する記憶を刻むために設置されるものであるはずだが、カッセル市中の「樹木と石柱」は、緑の未来社会を人々に意識させて、その将来における実現を記憶に刻むための「記念碑」であり、この意味ではきわめて異色である。まさに、芸術アカデミーでモニュメント彫刻講座を担当したボイスならではの独創的な発想であるといえよう。なお、このプロジェクトには300万マルクの費用が必要であったという。

[114] Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen.* S.1-2.

[115] Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen.* S.3.

されている。つまり、このプロジェクトはたんに「樫の木を市内に植えてまわる」だけの緑化行為――大多数の人々はそのように考えていたのだが――ではなく、前回のドクメンタ６における『100日間の自由国際大学』と同様に、「樹木と都市の関係」や自然環境の意味について人々に再考を促し、オルタナティブな意識――世界は〈別なふうでもありえる〉という意識――を覚醒させようと試みる、ボイスの大がかりな〈教育的コミュニケーション行為〉だったということである。

この教育のコミュニケーションは、はじめに計画段階での事前会議として、ボイス、植樹チーム、カッセル市長、樫の木のドングリ[116]、市役所代表の間で開始された。このとき、行政側はボイスの植樹計画を好意的に受け入れたという。かつてカッセル市が独自に市街区域の緑化計画を立てた際には、複数の部局間に管轄権をめぐる内紛――縦割り行政によくある官僚主義の弊害――が発生したため失敗に終わったが、ボイスが芸術家という特殊な立場で、かつてない手法によってこれを実行するのであれば、今度は成功するかもしれない、というのが賛同の理由であった[117]。カッセル市側は、ボイスの教育的意図を正しく理解したうえで合意したわけではなく、これをたんなる緑化促進の機会としてのみ捉えていたのだが、それでも市側との協議は成功裏に終わったのである。

ところが今回は、この市街区森林化プロジェクトに対して、カッセルの住民たちから次々と抗議の声が上がることになった。カッセル市内の歴史的景観を破壊する、駐車スペースがなくなってしまう、木々が大きく成長したときにガスや電力の供給経路を損なう危険がある、などといった理由からであった[118]。こうした反対意見をもつ住民たちとじっくり話しあい、樹木に対する偏見を克服する手助けをしたり、植樹に適した場所の一覧表を作成して合意を得たりするといった実務的作業を担当したのが、ＦＩＵの植樹チームを中心に一種の民間非営利組織（Non-Profit-Unternehmen, いわゆるＮＰＯやＮＧＯ）として設立された「ＦＩＵ樹木調整事業所(FIU-Baumkoordinationsbüro)」である[119]。

カッセル市内に置かれたこのＦＩＵの事業所は、独自に活動資金を集めて植樹と石柱の設置にともなうあらゆる業務――植樹予定地の住民や行政の関係部局との交渉、石材と苗木畑の管理、樹木と石柱の運搬、植樹作業と石柱設置、植樹された木々の世話、プロジェクトの広報活動、寄付金や資産の管理など――を遂行する人々、すなわち、ボイスとともにカッセルでＦＩＵの〈教育的コミュニケーション行為〉を実践する人々で構成されていた。しかし、この事業所はまた同時に、アッハベルクの団体「行動・第三の道」が推進する公益的な事業共同体の「実践的モデルケース」として位置づけられてもいた。つまり、事業所のメンバーはプロジェクトの遂行を通して公益的業務に必要な知識・技能を習得しつつ、オルタナティブな事業共同体の運営方法を実践的に学んでもいたのである。もちろんカッセル市民も、プロジェクトを通して都市と自然の関係について再考する機会を得るとともに、このＦＩＵの事業所によって、新しい民主的な事業運営の可能性を知ることができた。ボイスは「自治の原則および生産手段と事業収益を公益組織に帰属させるという原則」[120]

---

[116] ドングリが会議の場に「出席」したのは、植樹される樫の木もこのエコロジーアクションに参加する主要な当事者である、というボイスの考えを反映したためである。

[117] Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen*. S. 3.

[118] Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S. 182.

[119] Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen*. S. 4.

[120] Stüttgen: *Joseph Beuys 7000 Eichen*. S. 5.

にしたがって運営される、民主的でオルタナティブな新しい事業共同体という構想を、森林化プロジェクトと並行して、すでにドクメンタ７で実現していたわけである。

このように考えると、樹木と石柱の組み合わせからなる7000個のモニュメント、植樹というアクション、植樹されたカッセル市街の風景に加えて、プロジェクトを推進する「ＦＩＵ樹木調整事業所」の活動自体も、やはりドクメンタ７に出品された社会彫刻作品『7000本の樫の木』の重要な構成要素であり、オルタナティブな意識を人々に伝えるための〈教育的コミュニケーション行為〉の本質部分であったと理解される。そして、この大がかりなプロジェクトの全体が、ＦＩＵという「ボイスの大学」で行なわれた〈プロジェクトベース学習（ＰＢＬ)〉のひとつであったこと、社会のコミュニケーションをＦＩＵの教育的コミュニケーションへと転換していくための試みであったことに思い至るのである。

人々の意識を変えることで社会のコミュニケーション（すなわち〈社会システム〉）を変えようと試みたこのＦＩＵの『7000本の樫の木』プロジェクトは、カッセル市民の理解と協力、ドイツ国内外の多数の支援者からの寄付、ＦＩＵ樹木調整事業所の働きにより、５年後の第８回ドクメンタ初日に最後の植樹を終えて無事に完了した。しかし、その前年に亡くなっていたボイス本人は、この最後の植樹を見ることができなかった。最後の１本を植えたのはヨーゼフ・ボイスの妻エーファ・ボイス（Eva Beuys）と息子ヴェンツェル（Wenzel Beuys）であった。

３.５ そのほかのプロジェクト

『7000本の樫の木』開始から１年後、ボイスはもうひとつの自然回復プロジェクト『総合芸術作品‘自由ハンザ都市ハンブルク’(Gesamtkunstwerk ‘Freie und Hansestadt Hamburg’)』を計画した。北海の海底とエルベ川底から浚渫された大量の高濃度汚染ヘドロが積み上げられて、自然環境を完全に破壊された北海沿岸地区――かつてのアルテンヴェルダー村と果樹園がその下に埋もれている地域――を緑化するプロジェクトである。きっかけは、1983年にハンブルク市文化省から環境改善対策について依頼を受けたことであった。プロジェクトの目標は、ヘドロに含まれる危険な汚染物質が地下水層まで浸出することを防ぐために、同地区の地表面を植物で覆い、さらに各種の灌木や柳、ポプラなどの樹木を植えて緑地帯とし、浚渫物処分地という「死の地区（Todeszone)」を「芸術地区（Kunstzone)」へと、芸術の創造力による再生のシンボルへと転換することであった。

ハンブルク市文化省は、この再生プロジェクトのために当初予算として40万マルクを計上しており、ＦＩＵの研究グループが非営利の事業所を立ち上げて、寄付を募りつつ緑化計画を実行することになっていた。ところが、ハンブルク市長クラウス・フォン・ドホナーニ（Klaus von Dohnanyi, 1928-、ＳＰＤの政治家）が強硬に反対したため、この計画はハンブルク市政府によって1984年６月に中止に追い込まれてしまった[121]。

エコロジーに関するアクションと並行して、ボイスは国民投票（Volksabstimmung / Volksentscheid）

[121] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.36-37, S.43. なお、Stachelhaus: *Joseph Beuys*, S.181 によると、K.v.ドホナーニ市長は文化雑誌『アスペクテ（Aspekte)』誌上で「このような対象に芸術性があるのか」とプロジェクトの〈芸術性〉を否定する見解を発表したという。ここにもやはり、ＳＰＤの政治家ヨハネス・ラウの場合と同様の、伝統的で狭量な「芸術観」にもとづく政治判断が見られることを否定するものはいないであろう。

の連邦レベルでの法制化を実現するためのプロジェクトを進めてもいた。1967年の「ドイツ学生党」にはじまり、1970年の「自由な国民投票を支持する投票棄権者の組織」、1971年の「国民投票（自由な国民発案）による直接民主主義を支持する組織」、1972年のドクメンタ５、1977年のドクメンタ６、1978年の『オルタナティブへの呼びかけ』、1980年に成立した緑の党での政治活動と、一貫して直接民主主義という政治的自己決定の実現を――自由な教育による民主的な人格形成と、自由なマスメディアによる充分な情報提供の必要性とともに――訴え続けてきたボイスにとって、国家の重要政策を決定するための主要な方法として国民投票を正式に立法化することは、ＦＩＵにおいて追求すべき究極の目標のひとつであったともいえる。

この目標を実現するための政治的活動として、ボイスは、1983年に開かれた「緑の党」党員会議で国民投票に関する法案提出を訴え、さらに同年、アッハベルクで超党派の市民運動「行動・成熟した民主主義－国民投票（Aktion Mündige Demokratie - Volksentscheid)」を開始した[122]。こうしたボイスの活動が最終的にＦＩＵのプロジェクトとして結実したのは、ボイス没後となる1987年の第８回ドクメンタに出品された『ドイツに直接民主主義を求めるバス(Omnibus für direkte Demokratie in Deutschland)』においてであった。プロジェクト代表者はもちろんボイスではなく、かつてのボイスの学生ヨハネス・シュテュットゲンであった：

> 『ドイツに直接民主主義を求めるバス』は、ヨーゼフ・ボイスの仕事を継続することを、また、人々が自分自身を自由で平等な共同制作者であると、社会全体をひとつの「社会彫刻」へと作り上げる共同制作者であると理解できるように、力を尽くします。[123]

このように述べたシュテュットゲンは、車体の両側面に白字で「ドイツに直接民主主義を求めるバス・国民投票」というメッセージをプリントした１台の「二階建て大型バス」を、フリードリヒ広場の１本目の「樫の木」のそばに展示したのである。このバスには、通常であれば行先票が掲出される車体正面部に「主権（Souverän)」の一語が掲げられ、また、側面の窓には「政党から自由に」と書かれたポスターも貼りつけられた。もちろん、プロジェクトの目的はこのバスを展示することそれ自体ではなかった。ドクメンタ８に出品された「直接民主主義を求めるバス」は、その後、シュテュットゲンとＦＩＵのメンバーを乗せてカッセルを出発し、数年間にわたってドイツの各都市を巡回しながら、国民投票という直接民主主義的な政治意志決定の方法が実現可能であることをドイツ国民に教え続けた。いわば、ドクメンタ５に出品された「国民投票による直接民主主義を支持する組織の事務所」の長期移動体バージョンというわけである。

さらに、このＦＩＵの長期的な啓蒙プロジェクトを遂行するために、シュテュットゲンはボイスが『7000本の樫の木』プロジェクトで採用した方法、すなわち、民主的に運営される非営利の公益的有限会社（ein selbstverwaltetes Non-Profit-Unternehmen, Gemeinnützige GmbH.）を設立して組織的に活動するという方法を採用した。この事業共同体の運営資金も、植樹プロジェクトの場合と同様に、バスの運行を続けてほしいと願う多くの人々からの寄付金によってまかなわれた[124]。

---

[122] Stüttgen: *Freie Internationale Universität*, S.38-40.

[123] Walter Dahn(Hg.): *Der Bus*, Edition xyz, Köln 1990, S.9.

[124] Dahn: *Der Bus*, S.44.

ボイスによってデュッセルドルフ芸術アカデミーで開始された独特な〈教育的コミュニケーション行為〉は、その理念と方法論とともに、こうしてＦＩＵという特別な教育研究機関のかたちをとって、ボイスの弟子とボイスの理解者たちに引き継がれたのであった。

おわりに：「企業は大学になるべきだ」

1981年５月に行なわれたインタビューで「教育者としての現在のあなたの活動についてどのようにお考えですか？」という質問を受けたボイスは、「私はいまでも大学の教師（Hochschullehrer）ですよ」と答え、社会におけるＦＩＵという大学の役割、「従来の教育機関に対するモデル」としての役割に関して、次のような見解を示した：

> この自由国際大学には、あらゆる可能性が存在しています。そして〔…そうした可能性のひとつである〕経済活動の諸制度を、つまり、人々の職業活動の現場を、大学にするということが次第に現実化しつつあります。経済界における〔…〕事業組織の構造を大学へと変えていくことで、〔現代社会における〕諸々の問題が解決されるのです。〔…〕物質的財を生産するだけでなく、同時にもっと重要なこと、人間の能力を成長させることもまた、人々が働く職場で、つまりは企業内で実行できるのですから。このとき、企業は同時に大学でもあるのです。〔…〕企業は大学になるべきなんです（Unternehmen müssen Universitäten werden）。貨幣ではなく、人間の能力という資本を大きく育てる企業、〔…〕それは、当然ですが、現在生産されているものとはまったく異なるものを生産するはずです。つまり、人間が本当に必要とするような何か、自然を損なうことなく、この惑星が発達しうるような何かをね。[125]

かつて「教師であることが私の最高の芸術作品なのです。残りは何の価値もない屑です」[126]と自分自身について語ったボイスは、それからの約12年間で、自らの教育者としての役割を〈人格形成〉から〈社会形成〉へと大きく伸展させることになった。その〈社会形成〉のための手段こそがＦＩＵ、〈プロジェクトベース学習〉を公共の場で実践するという教育方法を採用した「ボイスの大学」であった。この方法の主眼は、政治活動や公益事業によって人々の意識改革を成し遂げつつ、同時にプロジェクト参加者＝学習者集団がその経験を通して成長するという、二重の意味での〈社会の形成＝教育〉を実践することにあった。しかし、ＦＩＵのプロジェクトが独創的であったのは、事業推進にあたって自律的な非営利の事業共同体を設立した点である。このオルタナティブな組織運営が、従来の教育機関にとってのみならず一般の営利企業に対してもモデルとなりえる存在であること、ＦＩＵ式の〈教育的コミュニケーション行為〉が企業活動においても採用可能なものであることを、ボイスは「企業は大学になるべきだ」というその大胆な一言によって表現したのである。

人間の能力をさまざまな分野で成長させることは、基本的に教育者の役割である。しかし、〈逸脱する教育者〉ボイスは、創造と自由の可能性を芸術家だけの特権としなかったように、あるいは、政治権力の行使を職業政治家だけの特権とは認めなかったように、人間の成長を導くべき教育という重要な役割を教育機関や職業教師――しかも、その多くは依然として権威主義の価値観から脱却

[125] Adriani u.a.: *Joseph Beuys*, S.180.

[126] この1969年の発言については、前原「ヨーゼフ・ボイスの教育思想」33頁を参照。

できない状態にある――だけのものにしてはおかなかった。〈自由に思考し創造する人間〉を作り上げる芸術、すなわちオルタナティブな教育のコミュニケーションは、〈教育システム〉だけでなく、芸術でも、政治でも、そして〈経済システム〉においても同様に実現されねばならない、これが〈別なふうでもありえる〉という理想を追求した教育者ボイスの一貫して変わらぬ信念であった。

主要参考文献

Adriani, Götz u.a.: *Joseph Beuys*. Du Mont Reise Verlag, Köln 1994.

Beuys, Joseph: *Aufruf zur Alternative*. FIU-Verlag, Achberg 1979.

Dahn, Walter(Hg.): *Der Bus*, Edition xyz, Köln 1990.

Ermen, Richard: *Joseph Beuys*. Rowohlt, Hamburg 2007.

Harlan, Volker u.a.: *Soziale Plastik. Materialien zu Joseph Beuys*. Achberger Verlag, Achberg 1984.

Stachelhaus, Heiner: *Joseph Beuys*. List Verlag (Ullstein), Berlin 2006.

Stüttgen, Johannes: *Joseph Beuys 7000 Eichen. Ein Arbeitspapier der FIU. Beschreibung eines Kunstwerk*. 1982.

Stüttgen, Johannes: *Freie Internationale Universität. Organ des erweiterten Kunstbegriffs für die Soziale Skulptur. Eine Darstellung der Idee, Geschichte und Tätigkeit der FIU. 2.erweiterte Auflage*, FIU-Versand, Wangen 1987.

Szeemann, Harald(Hg.): *Beuysnobiscum*. Philo Fine Arts (Europäische Verlagsanstalt), Hamburg 2008.

鈴木敏江『プロジェクト学習の基本と手法』教育出版, 2012年.

ソーヤー, Ｒ.Ｋ. (編)『学習科学ハンドブック』培風館, 2009年.

永井清彦『緑の党 新しい民主の波』講談社, 1983年.

西田慎『ドイツ・エコロジー政党の誕生 「六八年運動」から緑の党へ』昭和堂, 2009年.

フロム, エーリヒ『自由からの逃走』東京創元社, 1965年.

ホール, エドワード・Ｔ.『文化を超えて』ＴＢＳブリタニカ, 1993年.

ホロウェイ, ジョン『権力を取らずに世界を変える』同時代社, 2009年.

前原真吾「共振する芸術と教育（１）ヨーゼフ・ボイスの教育思想」『北海道大学独語独文学研究年報』第38号, 2011年, 26-50頁.

前原真吾「共振する芸術と教育（２）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1961－1963)」『北海道大学独語独文学研究年報』第39号, 2012年, 1-27頁.

前原真吾「共振する芸術と教育（３）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1964－1967)」『北海道大学独語独文学研究年報』第40号, 2013年, 24-53頁.

前原真吾「共振する芸術と教育（４）ヨーゼフ・ボイスの教育実践(1968－1972)」『北海道大学独語独文学研究年報』第41号, 2014年, 21-52頁.

ライク, チャールズ・Ａ.『緑色革命』早川書房, 1971年.

ルーマン, ニクラス『社会の教育システム』東京大学出版会, 2004年.

レイヴ, ジーン他『状況に埋め込まれた学習』産業図書, 1993年.

（東洋大学 総合情報学部 准教授）